

「何の科があつてぢや」  
「別に罪科はござりませぬ、吉崎御坊様へ御参詣の歸り道、覆面をしたお武士様に召取られてござります」

「お身がこれへ参つてから、殺された者が幾人ほどあるかのう」

「左様でござりまするな、多い時は日に四五人もござりませう、少い時でも一人二人お命を召されぬ日はござりませぬ」

「この中に絹笠屋藤右衛門殿家族の者、捉へられてゐる筈ぢや、まだ存命かの」

云ふ聲の下から

「存命でをります、藤右衛門の家内でござります」と片隅から聲かける者があつた。

「おゝそれにござるか、すると子息も娘御前も」

「皆居ります、しかし一時先は分りませぬ、取分け懐妊女は一國女様御好物と申しまするで、かう

云ふうちにも娘の命をお召しになるか分りませぬ、わたくしの命、伴の命、それは斷念めても居り

まする、なれど娘の腹に宿つた赤兒が日の日も拜まず、闇から闇へ落されてゆくかと思ふと、それ

が不憫しうござります、可愛さうでござります」

といふその言葉尾は消えてゆくやうにあはれであつた、

「絹笠屋さまばかりでござりませぬ、此所に居りまする者、一統いつ殺されるか分りませぬ、かう云うて居るこの口が、一時後には石のやうに冷たうござりませう」

かう悲しげに誰か云ふと、それに續いて、ワツと泣く聲が庫の内に満ち渡る、助三郎は鬼氣忽ち肌を刺して人生悲惨の極みを感じ

「助けたい、助けたい、如何にもしてこのあはれな人々の命を助けたい、水戸中納言様はよく、重罪なものあつて、死刑とは定まつても、その上一應二應三應の御詮議をあそばさずは、容易に仕

置場へ御引出しには相成らぬ、それは人間の命を、何よりも大切に思召すからぢや、而かも當お家では罪のない町人百姓を、むざ／＼と切捨てたまふ、同じ東照宮のお血は受けさせられても、その

なされ方に千萬里の差別がある、御當家の御恥辱ば御一門の御恥辱、我等幸ひに水戸様の御家來と生れ、反つて御當家の非道を見るも深き因縁あると見えた、息あるうちにこの人々を助けずば武士

と生れた甲斐がない、而かも兩手は縛られてゐる、どれ程に大聲を出しても、それが天に届からと

は思はぬ、嗚呼、嗚呼」と吐息して空しく思案に暮れはてた。

(四九)

「日頃信心する正八幡大菩薩様、南無観世音大菩薩様、お助け下さりませ」

斯う云ふ聲が突然として一方の隅に起つた、助三郎を始め一同が其方を見る、墨を流したやうに暗いので、よく見分ける事は出来ぬ、がいくつも並んだ青い顔のうちに散ら髪さんぱつの女が見える。

「誰ぢや、蕎麥屋のお内儀か」と男の聲で云ふ者がある。

「はい、そばやの家内でございます」

「お前まだ断念がつかぬと見えるのう、どうせ此處へ召取られては命の綱も切れ果て、二度目の目を拜めるわけもないから、思ひ切つて念佛でも唱へ、後世安穩をお祈りなさい、と云ふたのが分らないのかのう」

「断念めてはをります、しかし、わたしは一度だけ歸らねばなりません、家に心残りの事がございまずから、南無八幡大菩薩様、南無観世音大菩薩様、一度だけ歸して下さい、此儘首を切られたのでは、浮ぶ瀬がござりませぬ」云ふ聲があはれに聞えた、助三郎はこれに亦同情の涙を流ぐ

「これく其處のお内儀、云ひ残したい事があるとはどんな事ぢや、念の爲め云うて見さつしやい」  
「御親切によう有仰つて下さいます、心残り申すのは別の事ぢやござりませぬ、わたしの夫が永の大病でござります、足腰も立ちませぬ、其所へ又今年六十八になる姑が同じやうな大病で、三ヶ月前から臥つてをります、親夫の介抱を、今縛られてゐる此二本の手でしてきました、お醫者の有仰るには、二人とも内心衰へ、此儘拾置いては、とても奈快の見込なければ、人參買うて飲ませいとのお言葉でござりました、しかし人參は高價、わたくし共貧乏人の手では容易に買ひ調へる事が出来ませぬ、さりとて命にかへる寶はござりませぬ故、わたくしの身の廻り、家にある調度衣類全然人手に渡しまして少々の金子調達、それで人參を買ひ調へ早速煎じて飲ませうと思ふ所へお奉行所からお呼出し、其儘打庫へ入れられたのでござります、わたくしの命はどのやうにならうと親夫が助けたりござります、わたくしが居りませいで人參煎じて飲ます者もござりませぬ、殊にその人參を人手に渡してはならぬと存じ、納戸へ片附けて置きましたが、萬一わたくしが此儘命を取られましては、それ程に苦勞して買ひ調へた人參の在所知れず、折角の寶が持ち腐れになつて了ひますので、たとへ殺されるに致ししても一應歸り、親夫の手へ人參が渡して置きたいと思ひます、此

頃から八幡様、観音様へ御無理を願ひ、毎日毎夜同じ事を繰返してお願ひ申すのも、つまりこの爲めでございます」

蕎麥屋の内儀のあはれた物語を聞いては誰一人咽び泣きに泣かぬ物もなかつた、人間庫へ捕へられては誰も皆同じ運命、誰れも皆涙の種をもつて居らぬ者はないが、その中でも取分けてあはれた物語を聞いたので、薄暗い庫の中に一しほ凄愴の氣が満ちる、助三郎は心の中に「さて、不惑な者下民の女とは見ゆるが、その健氣な心は武士學者の家内にも優つて見ゆる、左程殊勝な心がけを持つた者も、暗闇同様な城の中に居ては光明のみとめらるゝ處なく、虎狼よりも恐ろしき魔女の牙にかけられる、天道は是非か、千代様のお力にも及ばぬ事を我等が如何に嘆き思へばとて及ぶまじき事とは知れど、何とかして助けてやりたい、此の内儀一人の爲めに親も夫も皆死ぬる」と無念の涙にくれる、折から庫の外へ見張り番人が下僕に提燈ともさせ、大小嚴かに扮立つて肅々と巡視する、其足音を聞つけて

「お役人様、お役人様、お願ひでございます、お助け下さりませ」と一齊に呼びたてる、番の役人は入口の戸を開けて下僕に持たせた提燈を取り上げ、それを高く振翳して庫の中をズラリと見渡す、

助三郎は此の時聲を張り上げて「お願ひの儀がござる、お取次下されい」と呼んだ、役人はギロリと光る眼を助三郎に投げて「願ひとは何事ぢや」

「外ではない、斯様にお召捕りと相成る上は、一命の助からうやうござらぬ、何れは打首か、さもなくば一國女どの、前に引かれ、一寸試し五分試しにもなるでござらう、それを悲しむのではないが、唯天下の寶をむざ／＼地の底へ埋め置くのを惜しう心得る」

役人はそれを聞いて不思議さうに身を寄せた。「何ぢや、天下の寶ぢや、それが如何した何處の土に埋まりあるのぢや」

(五〇)

助三郎は遂に一策を案じ出したらしく

「何をか隠さう、拙者元は東國の生れ、加賀大聖寺に知る者あつて遙々尋ね参る途中、思ひがけぬお疑ひを受け、かく捕はれとなつてござる、それにつき申上げたいは、所持の金子大判小判取交ぜ千二百兩、道中の危険を思ひ、御城下外れの草原中に埋め置いた事でござる」と眞しやかに述べ立

つる、役人は、黙つて聞いて居たが  
 「これ、馬鹿な事を云ふな、一人旅に左様な大金を持ち歩く者があらうか、殊にこれから大聖  
 寺へ参る途中、わざ／＼草原へ金子を隠し置くわけもあるまい、左様な浅果敢な事を申し、お上表  
 を偽らうと致してもその手は食はぬ、控へ／＼」  
 「お不審は御尤も、然しこれは眞實、一人旅とて大金を持つまいものか、お調べ下されば事は分る  
 尤も一兩日は當所に逗留、宿屋住ひ致すにつき大金を所持致すは懸念と心得、草原の中へ隠し置い  
 た、しかし強ひて申すでない、天下の寶を惜しませたまふお心なくば如何様ともよい様になされ、  
 拙者強ひては申上げぬ」  
 さう云つて口を噤んだ、役人は聲を秘め

「そりや眞實か」

「一命既に且夕に迫り、何の償りを申さうか、所詮は拙者を御同道、その草原へお越し下されば分  
 明致す」

「眞實とあれば同道致す、しかしその金子を如何様に致す心か」

「お尋ねにも及ばぬ事、首のない身體に金子を持つてなんと致さう、斯様に御雑作をかけ申すも、  
 前の世からの因縁と存じ、千二百兩の金子、残らず貴殿へ参らせる、我等、命を召された後にて、  
 思ひ出したまう日もあらば、一巻の御經にても手向けたまへ、すればそれにて満足仕る」

助三郎はさも眞實らしく云つた、役人は慾に光る眼を輝かして

「その方申すこと、實證とあれば、如何様天下の寶を埋め置くわけに参らぬ、我等同道篤と現場を  
 調べて見やう」

「重疊々々、それにて我等も心残りなく往生仕る」

「しかし只今は御用中、自儘に外出致しかぬるで、時刻を待て、二刻後には、非番と相成る、よつ  
 て其上迎ひに参らう、千二百兩、千二百兩、而も大判小判取交せて千二百兩それだけあれば安樂に  
 世が渡れる」

役人は口の中に私語いていそ／＼と出て行つた、庫の中は一時に唸り聲が立つ、助三郎が黄金を  
 餌に役人の心を釣つた仕方の巧妙なのを稱へると、その爲に一刻でも人間庫を出て、装束の風に  
 當り得る喜びを得たを羨やむ心が、自から吐息となつて出たのであつた。

「これく」と助三郎は蕎麥屋の内儀の方を見て  
 「今聞かれる通り都合よく参らば今夜の中に城外へ立出る便宜を得るか分らぬ、其時は其許の住居を訪ね、姑に託言致さう、其許住居は何れぢや」  
 「有難う存じます、わたくしの住居は九十九橋の手前、名家は大野屋と申します」  
 「諾しく、すると人參は何れに仕舞ひあるな」  
 「納戸の葛籠に入れてござります、わたくしの命は親夫の身替りになつて了ります、人參を召上り随分早く御余快になるやうと、お託言下さりませ」  
 「お身の頼み慥かに聞く、心配致すな、託言を致すであらう、それから細笠屋の子息お内儀、藤右衛門殿へ託言はござらぬか、役人衆同道にて参れば、何れへも懸念なく行かれる、何なりとも託言を致されへ」  
 「はいく有り難う存じます、わたくしの命も伴の命も盡くお上へ差上げ、御奉公の足しに致しまするが、娘は懐妊、腹の兒がいとしようござります、それ故西澤屋様と御相談なされ、油斷なく命乞をするやうとお傳へ下されば此上もない御高恩でござります」

「それも承知、外に託言をする婦人はないか、あらば、遠慮なく申されへ」  
 助三郎は大音に云つて、耳を澄ました、すると彼方からも此方からも、様々な愚痴、練言、未練の數を云ひ並べて、せめての慰藉に勉める、助三郎は一々聞いて委細承知の旨を云ふ、彼は果して慾に眼のない役人を利用して、思ふまゝ城外へ出るであらうか、夜は更けて風は死し鐘の音も絶えて奥殿遠く、琴、胡弓の音が聞こえる、人間庫の底には生きながら地獄の苛責を受けてゐる者もあるに、庭幾つかを離れて奥御殿は此世からの極樂、血に飽いた虎狼が花の下に一刻の長閑さを夢みる如き様であつた。

(五一)

金屋孫兵衛が様々に苦心を経た結果、福井の城を距る東北、武田村の附近に於て、妹お孝を尋ね出したのは丁度助三郎が、人間庫へ入れられた日の朝であつた、お孝は永見右衛門の忘形見お君を掻き抱き、少しばかりの知己を頼つて武田村に忍んでゐた、永見家は先代秀頼の生母、お萬の方の實家永見淡路守吉秀の一族であるので、越前家にとつては容易ならぬ家柄である、その血をうけた一粒種のお君であるから、その子の生命をとりとめて、ともかく無事に育てあげるの一面に主家

へ對する忠義、一面には三河守へ對する義理にも當る、お孝は女ながら、健氣にもそれを思ふので身にもかへぬ程の眞心を持つて養育の任に當つてゐた、孫兵衛は尋ねて其處へ至つた、お孝は孫兵衛の顔を一日見ると、懐かしさ、嬉しき、悲しきも取り交せてまづ先立つは涙

『よう尋ねて下されたが家の大難、且那樣、奥様、御隠居様、みな御戦死、残るはわたし、姫君を抱きまゐらせて雲の如くに簇る寄手の中を切抜け、逃げのび、やう／＼これへ落着きました、御蔭で姫君は御無事、村の衆、家の衆、皆さまの御親切な御介抱を受け、今日まで無事に居ります、疾にもお便り申す筈を、世を忍ぶ身とて隙間なく、今日まで御無沙汰御心配をかけて済みませぬ』

『何んの／＼その詫びに及ばうか、無事な顔を見て何より安堵、そなたのお蔭で姫君恙なく御成長遊ばさば、且那樣奥様草葉の蔭からお喜びもなさるであらう、實は安否も分らず、どうかと思つて心配したが、無事な顔を見て何よりも喜ばしい、此處は福井の城下を遠くに隔たり、隠れ家には屈強と思へど、今のお城の御様子は晝が晝に通らず、白が白で通らず、日は照つても暗闇、萬一の事あつてはならぬにつき、今から同道、文珠山の麓、麻生津村にはわしの御主さまとも神さまとも頼むお歴々様御逗留、よつてそれへ同道、そのお袖へ縫り奉らうと思ふ、おまへも姫君をお連れ申し

て一緒に参れ、悪いやうにはせぬ』

孫兵衛はお孝をこゝに一人置くのが心配で堪らなかつた、お孝一人ならばまだよけれど、懐には反逆同様の悪名を取つた永見右衛門の忘形見を抱いてゐるので、もし隠密の眼にでも觸れては一大事と思ふ懸念もあつた、されどお孝にして見ると今更知らぬ所へ行つて、不安な月日を送るよりは此の村人の同情の蔭に隠れて、ともかくにも安穩な月日が送れたかつた、それで孫兵衛の云ふ事を斥け

『折角のお言葉ながら、わたしは此處に置いて貰ひませう、隣村は加賀様の御領内、追手の者参ればそれへ落ち延び、命を全う致しまする』

『お前はさうは云ふが、女の腕にそれは出来ぬ、わしの云ふお歴々衆は三河守様のお頭でも抑へやうとなさる方、それほどのお方を頼りにすれば、姫君の行末も安堵、お前の忠義も現はれる、さあ行かう、すぐに行かう、こんな草深い所にゐては、わしが力を添へる事もなりかねる』

『いえ、わたしは行きませぬ、何處までもこちらの御厄介になつてをります』

お孝が言葉を盡して断るのを、孫兵衛は様々に云ひ諭して遂に麻生津村へ同道する事にした、お

孝は蟲が知らせるか懸念の眼を屢叩いて村人に別れを告げる、まだ東西の辨へもないお君が懐で悲鳴を上げる、孫兵衛は妹の心を引立て、巳の上刻、武田村を立つて丸岡の城下へ向つた、丸岡から斜に船橋へ着き、黒龍川を渡つて福井の城下へ入つた頃は、もう夜も更けて二十日近い月代が足羽山の中腹にかゝつてゐた。

「此處まで来ればもう大丈夫ぢや、文珠山までは二里半、一押しに押される、時に腹はどうぢや、己れは大分空腹を覚えて来た」

「強う草臥れました、これからまだ二里半もあると云へば、何處かで食事が致したいものでござります」

「丁度よいこの九十九橋を渡ると、橋詰に蕎麥屋があつた筈ぢや、それへ云つて凌ぎをつけるか」

「さうなされませ、あまり餓じうてお乳が出ぬやうになつては、姫君がお可愛想でござります」

「大きにさうぢや、それでは斯うまゐれ」

孫兵衛は先に立つて橋を渡る、近頃の城下なれば人通りは一人もない、橋詰の蕎麥屋に行燈が淋しうかゝつて、その上を夜風が渡る、孫兵衛はズツと入つて

「そば一つたもれ、夜更けてから氣の毒ぢやが……」  
と云つた、されどなんの返事もない。

(五二)

孫兵衛は不思議に思つて奥の方を透しながら

「夜更けて氣の毒ぢやが、蕎麥一つ頼みます」

重ねて聲を張上げていふと、奥の方で皺枯れた聲が聞える。

「お氣の毒ぢやが、店は休んで居ります、外へお越しなされませ」

「こいつは失敗つた、當にして来た蕎麥屋が、家業を休んでゐるといひ、城下へ深入りしてはどんな災難に遇ふかも知れねば、暫らくの辛抱ぢや、裏道を文珠山へ急がう、餓じからうが辛抱しやれ」

「是非がござりませぬ、それぢやお供致しまする」

お孝は後に従つて出た、見ると、川の堤をだらりと下りた草原に、提燈の灯が三つもみえる、そして五六人の人影があちら、こちらへ歩みを運ぶ、お孝は不審さうに

「あれはなんでござりませう」と立どまる。  
 「さうさのう、どうやら御家中のお方らしい、何か落物でもなされたか、何はしかれ見咎められては大變ぢや、早う行かうぞ」  
 孫兵衛が斯う云つて一足踏出す途端、キヤツと叫んで草原の中へ仰向に倒れた人がある、バツとたつ血煙り、提燈へ蠟燭が燃へ移つて、ぼう／＼と燃上る。

「ヤア已れ」と一人は叫ぶ  
 「さては無實を云ひ立て、此の所へ誘引出し隙を見て逃げやう魂膽ぢやな」と一人は聲を張つて云ふ、残る人数は何れも刀に手をかけて、一人の男を取り圍む、空には月、手には提燈その光りの集まる所に、大の男はすつくと立つ、今まで縛られていたらしい麻繩が、幾つにも切れて足元に散つてゐる。對手の腰から奪つたらしい白刃にたら／＼と血が流れた、四邊に殺氣が満ち流れる。  
 それは云ふまでもなく、佐々木助三郎であつた、彼は言葉を巧みに役人を誘引出して草原に埋めた千二百兩の黄金を與へんと誓ひ、夜更けて此處へ伴つて、必死の力に麻繩を切つて捨て、電光の如く役人の一刀を奪ひ取り、忽ち一人を切つて捨てたのである、残る人数は逃さじと四方を圍む、

されど三郎は狼狽たる様もなく、寄らば切らうと身を構へて、暫く様子を窺つたが、手に立ちさうなは一人もない、よし悠々と立去るとも追ひかけて来る様子も見えねば血刀を下げた儘、野道を斜めに歩み出した。

「それ逃すな」  
 互ひに云ひ合つて追ひかける、其處へ孫兵衛が出遭した、大切な囚人、私に囚屋から引出すさへあるに、行方を失ひ剩へ、同役一人を殺されて、應々城内へ歸るべき顔はない、一つ違へば忽ち繩日の恥を受けて、其身も亦人間庫へ押込められねばならぬ、其處へ來合せた孫兵衛及びお孝は取返しつかぬ不幸であつた。

「已れ曲者、同類に相違ない」  
 一人は斯う云つて孫兵衛の利腕を撻上げた、残る人数はばら／＼とお孝を圍む。  
 「これ何をなされます、怪しい者ではござりませぬ、只今から麻生津までまゐる者、人違ひなされませぬ」

孫兵衛は取られた手を揉み放す、お孝は眞青になつて



「御免下さりませ、わたくしはこの人の妹、やはり麻生津村へ参る者でござります、悪い事をした覚えはござりませぬ、お咎めをうける覚えも持ちませぬ、御免なされませぬ」  
 お君を袴とかき抱いて涙ながらに云ふ、されど役人に慈悲の耳はなかつた、助三郎を取逃がした云譯にせめて孫兵衛を伴ひ行かうとの考へである、且つは幼少の娘を連れだした女、この二人を一國女の前へ引行かはその功によつても罪科を赦免せらるゝであらうとの希望もあつた、依つて孫兵衛、お孝を高手小手に締め、助三郎に切られた同役を其處に見捨て、悠然と引揚げた、孫兵衛は高田村を離れじと云つたお孝を強ひて此處へ連れ出して、斯うした憂目を見たのであるから、面目なさと口惜しさに、踏む足も地に着かぬほどであつた、おはれこの二人は一應の取調べもなく人間庫へ押籠められた、近頃の不思議は今日一日一人の命も召されず、夜に入つてからも鬼の迎へはなくて一同露の命を繋いでみた、助三郎は歸らず新入の男女が泣く泣く引かれて來たのを見て、庫の中は又一頻り動搖した。

(五三)

光圀は格之進と共に助三郎の歸りの遅いのを氣遣つてゐる。

「如何致したであらう、強う歸りが遅いではないか」  
 「まことに御意、かれこれ天も明けやうと申すに、今以て歸宅仕らぬ、自體如何様に致したでござりませうな」  
 「合點ゆかぬ、近頃は福井の城下に人喰鬼が出て誰彼の見境もなく人間庫とかへ引連れて参るといふ、或は助三郎もその鬼共の手に罹つたのではあるまいか」  
 「何とも氣掛り、今から城下へ出向き、様子を見て参りませうかな」  
 「左様ぢやのう、國元を出發致す時から生死を共にと誓てゐる、助三郎はいよいよ城内へ召取られたに相違なくば、乗込んで救ひ出すか、又は同じ鬼の牙にかゝつて一命を落すか、何れとも致さねば相ならぬ、併しせくところではない、當家の主與兵衛殿の思案もあらう、萬事天が明けた上の事ぢや」  
 云ふ聲の了らぬうちに表の戸を破れるばかりに叩いて  
 「柴田殿、柴田殿」と呼ぶは、紛ふ方もない助三郎であつた、格之進は聞耳で。  
 「やゝ歸つたやうでござります」

「疾く見て参れ」  
格之進は心得て駆け出づる、まだ臥床へも入らねば常の通りの扮装、油断なく一刀を左手に持つて

「誰ぢや、助三か」

「おゝ、此所明けたまへ」

格之進は表戸をがらりと明ける、西へ傾く月の光りと共に、助三郎は血刀を下げたまゝ入った。

「や、この様……」

「命拾ひをして来た、千代様は」

「其許お歸りを待ちかねたまひ、まだお目覺、申すも恐れ入った儀ぢや、早や御挨拶致され」

「心得申した」

云つて始めて手に下げた血刀に氣がついた、それを敷居の片隅に立てかける。

「この刀はな」

「只今獄卒を切つて参つた、もはや無用、作又に言つけ、何れへでも捨てさせ下され」

云ひ置いて奥へ通る、光圀は助三郎が無事に歸つたと知つて、喜ばしげに襖際まで出迎へた。

「助三か、よく無事で歸つたのう」

「これも皆神明佛陀の蔭でござります」

「みるところ顔の色も常でない、且つは強う瘦れて居る、どう致したな」

「御覽の通り兩刀も奪られ申した、殊にこの手この——手に、細目の恥を受けてござります」

光圀は聞くうちに、元の座へ就く、格之進は血刀を捨てさせて歸つて来る、助三郎は未座に手を

つき兩眼に涙を浮べて

「さて何からお話申さうにも、先だつは泪でござりまする」

「只今聞くと、其手に細目を受けたといふ、人喰鬼に追られ、恐ろしい人間庫へ入れられたか」

「御意にござります、先刻これにて御相談申上げた主意に従ひ、絹笠屋藤左衛門に斷念の口上を傳

へたく、尋ね参る途中、數十人の武士に出逢ひ、無念ながら細目の恥を受け申した、併し千代様、

格之進どのも聞き召され、それに依つて此世からの地獄の様を眼の前に見てござる」

「さらば貴殿も人間庫へ入り召されたか」

「いかにも左様ぢや、多勢に無勢、身を迷るゝ所なく、人間庫へ引かれ申した、此世からの地獄とは誠にその庫の様でござり申す、罪もない女、老人、高手小手に縛られて薄暗い庫の内に縛られ居る、一國女の顔に雲のかゝつた時、その中に誰れかが引出されて命を落とす、その事を扱ふは獄卒、慈悲も情もなく、引出しては命を取る、拙者も亦其中に縛められ、眼の前に無惨な人の様を見て、そゝろに涙を流し申した、今太平の御世六十餘州の津々浦々に御仁政至らぬ限もないと云ふは偽り、當御城内には無實の者、血の涙に咽びをる、申すも恐れ多けれど誠に御仁政の疵ではござるまいか、御家に忠臣数多あつても、一言の御諫言申す時は、一國女怒りの牙、小田山多門 媚の餌、それが直に身に迫つて命を斷ち、知行を斷つ、それ故近頃絶えて御諫言申上ぐる者もないと云ふ此上は千代様格別の御思召しを以て彼等無垢の人々をお助けなさらではなるまじく心得まする」

助三郎はそれを言葉の始めにして人間庫の惨状、そのうちには孝子もあり貞女もあり口へ出して語るさへ涙の種になる程、健氣な者も交り居ることまで、手に取る如く物語つた、光圀は黙つて聞く。

(五四)

助三郎が實地に廻て来た物語を聞くにつれて、光圀は唯吐息の外はなかつた、これがもし五萬石、十萬石の主にてあらば、強ひても登城、城主の無法を矯直す仕方もあれど家柄と云ひ、知行高と云ひ、且つは年齢と云ひ、大阪陣に於ける拔群の功名と云ひ、地位は光圀の上にて在つて身分は將軍家に次いでゐる、若輩の身をもつて、目のあたりに諫言、長者に禮を失ふは、光圀の爲しかぬるところ、なるべくは餘所ながら心づけて其非行を改めさせやうと思つたが、今はそれだけの餘裕もない、斯程の暴政、斯程の亂行、其一端にても江戸將軍の耳に入らば、例へ先代の功名はあつても、家名斷絶は云ふまでない、殊に人間庫の惨事、孝子節婦を引提へて、罪人同様に切捨つること、まことに天下動亂の基、古今例なき暴虐ぢや、これをして捨置かば、天下何者か捨置き難き事あらう、今は猶豫すべきでない、三河守殿御取用なくば手段を以て一國女の一命を絶つ工風もあらう……と深く心に覺悟した。

さらからするうちにほの／＼と天が明ける、與兵衛は朝の挨拶に罷出る、光圀は近う呼んで「主人へ尋ぬる、當番の家老は誰人ぢや」

與兵衛は暫く考へ

「勝山の城主林長門守殿と心得申す」  
「長門守は御先代秀康公に仕へて忠義の名を取つた古兵 ちや、義理も分明に心得居らう、さらば今より登城致す」

「何と御意ぢや」

「聞きしに増る亂行、捨て置いては御爲にならぬ、今より登城、三河守殿御目通りを願ひ上げ、理非を説いて、無益の殺生をお止め申す」

「忝うござる、有難く心得申す、貴殿なればこそ左様に善事へ耳を傾けたまふ、家老重役度々御

諫言申上げ、その爲め御手打になつた者数知れねば、遂には一言御意見を申上ぐる者なき折柄、其

許様お命にかけられ、三河守様へ御諫言下さるとは、何共有難き事、お禮の申上げやうもござり申

さぬ、林長門守殿御番とは申し條、城内の政事は小山田多門一身に引受け、何事によらず自儘に取

計ひ居ると申せば、其許様御思召も、如何様な邪魔が入るまいに限らぬ、よつて拙者案内を仕らう、

只今にては浪人、浮世に心を斷ち居れど、魂は絶間なくお城の中へ通つて、案内は心得居申す」

「さらば貴殿案内を下さるとか」

「御意ぢや、御供の一人に加はり城内の案内を致すでござらう、暫くお待ち下されへ」

斯う云つて奥へ行つた、光圀は與兵衛の心の香を喜ばずにみられなかつた。

「いよいよ御登城でござりまするか」

「おゝ、死を覺悟して登城致す、お身達も左様に心得」

「何處迄もお供致しまする」

與兵衛は暫くの間に身装を改めて、光圀の前に出る、主従三人、それに主人の與兵衛を加へて、

朝日の瞳々と昇る時文珠山を出發した、作又は途中まで見送つた。

「其方は参るに及ばぬ、明日にも孫兵衛立歸らば所用あつて御城内へ参つた旨申聞け、お身は國へ

立歸れ、以來改心、再びお母に苦勞かけるな」

助三郎は此の一言を遣し置いて袂を分つた、先供は與兵衛、殿は助三郎、光圀は間に挟つて、福

井の城へ差かゝる、大手門の番をしてゐた林求馬の組下遠藤次右衛門は、眼を怒らせ

「やあ、御家中に見馴れぬ者何れへ参る」

と咎めだてした、格之進は身を迫める。

『三河守殿へ所用あつて罷り通る』  
と横柄に云ひ放つた、次右衛門は眼を圓うして

『言語同断、三河守様に向ひ、直々御對面を願ふなどは以ての外の口上、左様な事がなると思ふか、これや知れた、お身達は狂人ぢやな、狂人でなうて左様な事は云はれぬ管ぢや、退れ、退れ』

『粗忽するな』と格之進は威丈高になつた。

『此お方を誰方と思ふ、恐れ多へも水戸左中將様ぢや』

『え』と喫驚したが『何んぢや、水戸様ぢや、これよい加減人を杖罪坊にして置け、御三家隨一たる水戸の若様、先觸もなく御出でがあらうか、左様な事を申すが、つまり氣狂ひ、とくとく退れ、無禮致すと其の分に差置かぬぞ』

(五五)

與兵衛はずつと出て

『その方拙者の顔を存じてをるか』と云つた、次右衛門は驚いたやうに見て

『貴殿は大門殿でないか』

『いかにも大門與兵衛、御當家を見限り、先年永の御暇を願ひ、文珠山へ退いて風月を友と致しをる、此度水戸左中將様御越しを幸ひ、御供をして當お城の御門を潜つたは、三河守様の亂行を見兼ねるからぢや、無禮して後日の災難を醸しては相成らぬ、我等引受けきつと云ふ、此お方は紛ふ方もない水戸様の御世嗣、左中將光圀様ぢや』

與兵衛の口上を聞いて、次右衛門はやゝ考へる、下役の一人はこの珍事を報告すべく驅けて行た、光圀は次右衛門に向つて

『こゝに言葉争ひ致すのは無益、三河守殿へ御目通りを致せば萬事明瞭、罷り通るぞ』

云ひ捨て、歩み出す、そこへ林長門守の家來山口玄蕃宙を飛んで馳せつけた、光圀の姿を見ると、ビタリ大地に兩手をついて

『俄かの御入來、御出迎ひの用意もなく失禮 仕る、まづ入らせられませ』

先に立つて案内した、思ひがけぬ水戸殿御世嗣左中將様御出でと聞いて、勤番の武士は我一とかけ出で、大玄關の敷臺から二列に並んで土下坐する、月番老中林長門守は敷臺迄出迎へる、光圀は

『宥せ』と一言悠然と進み入る、茶坊主二人廣書院へ案内した、助三郎、格之進、與兵衛の三人も

後につく。

此時三河守は一國女を對手に、盃を傾けてゐた、傍には阿諛の徒が大勢詰める、多門はお側去らず、血のやうな酒を脩めてゐた、其處へ取次役が出て、水戸光圀公御入來の旨を披露する、三河守は流石に顔の色をかへたが、多門は嘲笑つて

「何と云ふ、水戸左中將様御入來と云ふか」

「御意にござります、お先ぶれもなく俄の御入來、それによつて長門守様と取り敢へず御對面、御來意をお尋ねになつて居ります、何様御儀行と見えて、御供の衆はお兩人だけ、元の御家中大門與兵衛どの御案内、左中將様御せには是が非でも御前へ御目通り致したき旨御所望、何と御返答を申上ぐべきか、一應御内意を承はります」

多門はつくづく聞いて

「何とも合點ゆかぬ、いかに御儀行の道行とて、まことの左中將様御入來とあれば、それ／＼御先觸れがなくてはならぬ、しかも其事なく俄の御着、殊に御供の衆として僅か御家來兩人お附添ひとある、旁々不審の點少くない、御不興を蒙り永のお暇となつた大門與兵衛同道と云ふさへ疑へば

疑ひの種になる、我等推量にては先日以來噂のあつた公儀隠密衆、左中將様のお名を騙り、御城内深く入込んだに相違ない、油断あつてはならぬ、表は他意なく御饗應申上ぐるやうに見せかけ、一寸も油断なく氣を配らうぞ」

「心得てござります」

「この儀長門どのによく申置け、御用の隙を見計ひ、我等も後より参るであらう」  
取次役は委細を領して出て行つた、三河守は其あとを見送つて

「水戸左中將殿御名を騙り入込んだは何者であらうかの」

「穩密衆に相違ござりませぬ、先日以來頻つて噂ござりました」

「油断ならぬ、萬一無事に歸しては、如何様な咎め参るかもしれぬ、其の邊よく心付け置け」

「思ふ仔細もござります、御懸念遊ばしまするな」

「其方を頼みに思ふぞ」

「數ならねど日頃の御恩に報い奉る時節到來、一命を擲ち、この難所を切抜けてお目にかけてます」と言葉強く云つて「昨日以來一國女どの御機嫌に雲がかつた、今日はそれ／＼用意をして、罪人

「趣向と申しても新しい事ではござりませぬ、なれど此度は一時にお心の雲を晴らす存念、それによつて人間庫へは出来るだけ罪人を詰込み、只今は腕の冴えた太刀取の詮議中でござります、大阪御陣の御三方四方八方へ渡り合つて多くの首を得た勇士が、まだ大勢生残り居ります故、其内から最も手練あるものを選び、正巳刻から切始め、其勇士の腕の續く限り、切つて切つて切り捲り、その血汐をお下物に参らせやう心組みでござりまする」

それを聞くと一國女の白い頬に薄紅をばかしたやうな色が出て、深く唇が割まれた、一國女の顔を見るのが忠直には月花を見る樂しさであつた、心よげに盃の數を重ねる。

「この趣向御意に入りましたかな」

一國女はにこりとほく笑んだ。

御意に入つたと見ゆる、趣向の概略を申上げたばかりで、はや御笑顔が見え始めた、いよいよその日とならば如何様の御喜びがあらうも知れぬと、多門は満足らしい顔をして

「市右衛門はあるか、市右衛門々々」と呼んだ。

裁野市右衛門、次の間から膝行出る。

の制敗を致さねばなるまい、のう、求馬」

「御意にござります」と求馬はすぐに同じた、一國女は三日月形の眉跡を擧めながら媚ある眼を忠直に向けて

「胸の雲が晴れませぬ、結構な御酒を頂いても一向味よう思ひませぬ」

「さうあらう」と忠直は溶けて流れさうな心でうけて「暫く待て、多門に面白い趣向もあるげぢや、今から用意一兩日のうちには御身の胸が開けるやうな、よい日を見せうぞ」

「楽しんでお待ち申しまする」

「憂晴らしに一獻過せ、盃を取らせるぞ」

(五六)

それでも一國女の眉の間に變黴てゐた黒雲は除れなかつた、忠直はそれが懸念に堪へぬらしく振返つて

「多門、お身の趣向した獻立を語り聞かせよ、それで無うては一國女の笑顔が見られぬ」

「御意」と多門は扇を膝に身を進めた。

「御前にござりませぬ」

「申つけ置いた太刀取の人選はな」

「されば聞かせられ、森川内藏丞、小栗忠八、野間善兵衛この三人は大阪夏御陣の時、殿様御手についで抜群の働きをした勇士でござりませぬ、取分け小栗忠八は武田派の達人太刀取つては當御家中に並ぶ者もござりませぬ」

「その三人召出しめされたか」

「御意にござりませぬ」

「さらば御縁先へ呼び出し召され、直々器量を御覽になる」

「心得申した」市右衛門は次へ下つたが、程なく三人の老武士を伴つて三の間の縁座敷へ出た、多門は見下すやうに見て

「森川内藏丞、小栗忠八、野間善兵衛、大儀であつたの」

三人の老武士は両手をついてゐた、多門は重ねて

「御上意によつて尋ねる、お身達は大阪御陣の時抜群の手柄を致したさうぢや、誰殿のお手についでゐた」

「てゐた」

「軍御奉行太田阿波殿のお手に付いてをりました」と内藏丞はすぐ答へた。

「森川内藏丞、一日に何人まで切れるかのう」

「左様、君命を首に戴き、傳來の一刀を振り申せばまづ十五人乃至二十人、それ位は此腕に覚えがござります」

「おゝ」と多門は頷いた「さらば善兵衛は」

「拙者も同様、二十人までは左程苦勞もあるまいと心得ませぬ」

「さらば小栗忠八に尋ねる、其方はどうぢや」

「人数に限りはござらぬ、腕の續く限り幾人にも切捨て、お目に向け申す」忠八は傲然と云つた。

「人数に限りがないといふ、忠八の器量抜群ぢや、さらば其方に申付けるぞ」

「何事の御用でござり申すな」

「罪人の制敗ぢや、明日又は明後日、お上御用意のなるを待ち、改めて呼び出す、人間庫の罪人只

今のところ四十餘人罷り在る、それを一々撫切りに致すのぢや」



「理もないこと、只件のまゝに仕る」  
「仕損じなく致すやうに、御増加の御沙汰もあらう、神妙に勤められ」  
忠八は面目を施して引下つた、入違へて取次役が再び出る。  
「申上げます、水戸左中將様と名乗る客人、急々御目通りを願はれます、如何様に仕りませう」  
多門は聞いて「煩さい人ぢやのう、長門殿へ左様に申せ、只今お上御所勞、御對面の儀協はせられぬによつてゆるゆるお待ち下さるやうと、申上げ置き、酒肴膳部に氣を付け、如才なく饗應致し置くのぢや」

「心得てござります」取次役は引下つた。

三河守は多少氣にかゝる事があるやうに眉をひそめて

「捨置いて宜いであらうかの、假にも水戸左中將と名乗る者をその儘に致し、義理が立つてあらうかの」

「御懸念なされますな、委細は拙者心得、御名に御疵の付くやうな事は致しませぬ、それよりは市右衛門に申付ける、仕置揚の用意怠るまいぞ」

多門は獨り心得顔に云つた。

(五七)

光圀の前には、山海の珍味が併べられ、美しい小姓が三人も酌に出て居る、林長門守は有らゆる眞心を以て饗應の役に任じ、それ〴〵膳番へ旨を傳へる、膳番は庖丁の切味を見せるは此時と、思ふやうに粹を集めて料理する、名産の雲丹、烏賊、鮎などの新しいのがしきりに膳にのぼり来る、光圀は平氣で盃を上げてゐるが、助三郎と格之進とは心配が胸に満ちてゐるので、盃も取らず箸もつけず、此場の成行を氣遣つて居る、すると、茶坊主が惶しく驅けて来て

「只今小山田多門様御出ましでござります」と報告する、三河守殿御出座とあつても然らばきとこる、小山田多門出座の旨を披露したので、助三郎、格之進、互に眠と眼を見合せる、長門守は見かねて座を立たうとする、折柄、多門は求馬と市右衛門とを従へて現はれ出た、與兵衛は兼ねて知合つた間であるので思はずも顔を伏せる、多門は末座に平伏す、長門守は少しばかり膝行り出て

「左中將様へ申上奉る、三河守傍用人小山田多門御目通を致しまする」

「うん」と光圀は此方を見て、「小山田多門、姓名を聞き居る、顔を上げへ」

多門は顔を擦げる、光圀は瞬きもせず見据えて  
 『我等三河守殿へ申上げたき事あつて參上、然も先刻から數々馳走にあづかり、心にもなく銘煎致した、三河守殿所勞といふ、容體はどうあるな』

多門は顔を疊に擦りつけて

『御懇の御意を蒙り、三河守様定めて御喜びと存じまする、俄かの御入來、御馳走の用意もなく、不都合至極と存じ、只管恐縮の外ござりませぬ、三河守様早々御目通りもあるべきところ、御所勞と申し當座失禮、萬事は多門御名代として御對手申上げ奉る、明日は御快氣に向はせらるゝであらうと、典醫共申上ぐるにつき、其上御對面の思召しと見奉る、何はなくとも心限り御饗應申上げたい、卒爾ながら奥殿へ來らせられませ』辯舌流るゝが如くに云ふ、光圀はつくづく聞き  
 『やはり御所勞か、さらば御全快を待ち申さう、しかし我等性れつき贅澤は嫌い、茶漬に香の物あらば事足る、無益の馳走望みでない、左様心得へ』

『其儀も承知、さらば御家に傳はる御寶物類御慰みに入れ奉る、まづ此方へ來らせられませ』  
 云ふと二人の茶坊主が罷出て平伏す、光圀一行を案内して奥殿へ伴ふ用意とみえた、光圀は立上

つて静かに歩む、後には助三郎、格之進、與兵衛、その後から多門附添ひ、長い廊下を奥殿へ通ると、其處にまた結構な座が設けてあつた、光圀は設けの座に就く二人の家來と與兵衛とは三の間に座を占める、すると品のよい茶坊主が菓子運び、茶を運ぶ、光圀は泰然として饗を受ける。

『片田舎の事とお口に合ふものもあるまじく心得ます、追付お夕飯を差上げます、それ迄御家傳來の書畫類又は器物等御一覽なされませ』

『いや』と光圀は頭を振つて、『三河守殿御所勞の折柄、優長らしく左様なもの拜見致す心もない、御全快の上共々賞觀致すであらう』

『お氣に召さずとあらば強ひては申上げません』と多門は云ひ放つて扇を膝に身を構へる、そこへ月岡養以は坊主頭をてか／＼させて出で来る。

『小山田様へ申上げます、公儀穩密衆姿を變へ、當城内へ御入來との噂ござります、御油斷遊ばしではなりませぬ、此の儀取りあへず御知らせ申上げます』

多門は聞いて頷いて、末座に控へた與兵衛に向ひ  
 『大門殿、貴殿も元は御當家御家來、御先代様には一方ならぬ大恩を受けて、御出でぢや、すれば

御知行にはお放れなされても、御當家不爲を思召しはなされまい、どうぞござるな』  
 『勿論の儀、御家大恩を忘れねばこそ、斯様に左中將様御供をして参りござるわ』  
 『それにつきそつと御意得る、御家中に人の數は多けれど、水戸左中將様を寄じの者一人もない、其虚に附入り、恐れ多くも御連枝の御名を語り、御家の不爲を御圖りはござるまいな』  
 『言語道斷、すると貴殿は左中將様を贋者と仰せか』  
 『ではござらぬ、なれど只今披露致した通り、穩密衆御入來の旨しきつて噓致し居る故念の爲お尋ね申した迄でござる』

『その御懸念御無用、我れ等も直々承はつた譯ではないが、此頃から親しく御様子を見参らす所、尋常ならぬ御器量、正しく凡下の御身ではない、與兵衛保證、左中將様に相違ござらぬ』  
 『御言葉ではござるが與兵衛殿御引受だけでは納得ならぬ、何か證據でもござり申すか』

(五八)

多門は光圀一行を愚弄するが如き態度で云つた、元來氣の格い格之進は、腹に据ゑかねて刀の柄へ手をかける、助三郎は無言、光圀は眼顔で格之進を抑へながら

『ぢやに依つて云ふでないか、我等眞實の光圀か、又は公儀穩密の者名を騙り入込んだか、現當に様子見せたく三河守殿へお目通りを願ひをる、三河守殿と我等とは血を分けた従弟、江戸に於て兩三度も對面致しをれば、三河守殿御目に曇のない間、よも御見忘れはござるまい、證據呼はり致す隙に、お目通り叶ふやう致し参れ』

と多門に向つて嚴しく云つた、多門は恐れ入つたやうに平伏し

『御立腹重々御尤も、御詫びの致し様もござりませぬ、如何さまこれは證據を拜見致すに及びませぬ、お目通りさへ濟めば分明、しかし先刻より申上る通り、折から御風邪、押して申上げるわけにも参りませぬ故、一兩日は緩々御逗留遊ばしませ』

『御病氣とあれば是非に及ばぬ、心は追けど御全快を待つと致さう』

『早速の御承知、何とも忝けなく心得申す、就てはこゝは端近、當城天主閣は四方の眺望殊に勝れ、御旅中の憂さを晴らし給ふに屈強と心得ます、いざ御案内、から來らせられませ』

多門は掌を返す如く懇懇に云ふ、光圀はすぐ了承して

『まことに當御城は柴田勝家以來由緒もある、さらば天主閣を拜見致さう』

助三郎と格之進は光圀が軽々しく多門の口に乗せられて、天主閣へ昇らうとするを危んで、それとなく引止めるやうにしたが光圀は振拂つて立上つた、奥兵衛は光圀に随つて後につく、多門は案内をして立に立つ、此時、日は暮れて間毎に燭臺が晝の如く灯される。さうしてその間々には屈強の武士が配置され、まさかの時は直ちに光圀一行を取圍む氣色もみえた。光圀は悪びれた様もなく進み行く。

天主閣には早や主設けがしてあつた、四方の窓を開け放して中央に燃え立つやうな毛氈を敷き、それを美しい屏風にて取圍む、御馳走役としては月岡養以を筆頭に十人あまりの若侍が伺候する、そこには又山海の珍味、茶坊主の口軽、當國名物の幸若舞、其外様々の役者も參つて、忽ち一大宴會が開かれる、多門は一端下へ下りたが、程もなく又出て来て如才なる立廻る。

誠に多門の云つた如く天主閣よりの眺望は得も云はれず美はしかつた、足羽山の翠は前に茂り、その下を帯の如く流れる足羽川は、空に照る一輪の月を碎いて、波の一つ一つた白銀の玉を漲らす、城下の街は灯の消えた如く闇に包まれ、遠くに見ゆる海の色は銀の延板を敷いたやうに煌々と光を放つ、あはれ此城、あはれ名譽ある此城、卑しい婦人の爲めに汚されて、基礎既に動かうとする、

秀康公御靈見行さば、いかに口惜く情なく思召すであらうと、光圀は景色を見るにつけても涙、昨日を忍び、今日を思ふにつけても又涙、侷められる酒も鹽水の如くに辛く感じた。

其夜は斯うした酒宴の内に果る、臥床は矢張天主閣の上に設けられた、光圀主従、そこに穩かならぬ夢を結んだ。

天が明けてみると、光圀は上段の間に、三人の家來は遙かの末座に臥床が設けられてほかに伺候した者もない、光圀は顔を洗ふべく下へ下りる、と其處に月岡養以の輩、五六人詰めてゐる俄かに作つたらしい湯殿へ案内した、光圀は毎朝嗽を了ると、伊勢大神宮を遙拜し、次に京都の御所を拜み、其次に江戸將軍家の無事を祈り、續いて父母始め一族の武運長久を祈るのが例であつた、よつてその朝も口を嗽ぎ身を淨めて、元の天主閣へ登り、式の如く禮拜する、そこへ二人の家來と奥兵衛とが上つて来て同じやうに禮拜する、被是してゐると朝の膳が運ばれる、それには數々の料理と香のよい酒とが附けられる、光圀は顔を擧めて

「これは無用に致された、昨夜は據なく頂戴致したれど、三河守殿御所勞と云ふに我等のみ御酒を頂く法はない、お湯漬だけに事足り申す」

「いや、左様に仰せられる程の設けとてもござりませぬ、我等一統、殿様の仰せを受け、出来るだけ御懇申上げる、何はなくとも一献お過しなされませぬ」  
 光圀が何と云つて辭退しても聞入れず、養以は益を強ひるのであつた。

(五九)

一國女の顔には昨夜から村雲かかゝつてゐた、それは光圀が來てゐるのを面白からず思ふのと、小牟久が無事で元の居間にゐるのを心よからず思ふ爲めであつた、一國女は顔こそ類なく美しけれど、心は根曲て常人にはかり知る事の出来ぬ僻んだ氣質を持つてゐる、彼女は世の事柄と周囲の人間とを自分の思ふ儘に働かせようとする慾望を持つてゐた、少しでも己れの心に悖る事があるか、その身の儘にならぬ事があると不快の念が一片の雲となつてすぐ顔へ現はれる、顔へ現はれるのはまだよいが、その思ひが胸に纏んで我ながら始末に困る程の結果を生む、彼女はその爲めに自分で自分を苦しめる事がまゝあつた、さうした場合には誰人が如何な手段をもつて慰めても、心の縫れを解く事が出来なかつた、唯一つの方法としては紅い血沙を見る事であつた、一國女が血沙を好むのは、ある女が蛇を好み、又毛蟲を好むと同じく一種の病的特質であつた、普通の人が心に苦悶あ

る時、花を見て慰み、月を見て慰むと同じく、血を見て慰む、もし世の中に一滴の血沙がなかつたら彼女は眞實の氣狂ひになつてゐたであらう。  
 『様の御機嫌が強うお悪い、御氣に入りの多門殿御口上をなされても、お笑顔がとんと見えぬ、どうしたものでござりませうな』

一國女に附屬してゐる中藤達は何れも眉に皺をよせる、一國女の顔に雲のかゝるのを恐れるのは、その不機嫌から起る苛責に堪へぬばかりでなく、それを癒する唯一の方法として罪なき者が、お庭内へ引出され、空しく命を失ふのを見る、その辛さを思ふからであつた。

『また恐ろしいお仕置がなければようござんすがなあ』

『ほんにお仕置を見るのは身を切られるより、辛うござります、此の二三日は御機嫌に雲がかゝらず、恐ろしいお仕置の御沙汰も聞かず、氣も心も伸び伸びして居りましたが今日あたりはきつとお仕置があるでござりませう、それを思ふとお宮仕へ程辛いものはござりませぬな』

一人が云ふと一人は彼方の長局を透し見て

『あれ御覽じませ、多門様がお部屋へお越しなされました、きつと御制敗の御相談に相違ござりませぬ』

せぬ。今日は誰れが切られるでござりませう、あのお方の御笑顔を見る蔭には、罪もない男女が無  
惨にも亡びて行きます、何んと恐ろしい世界ではござりませぬか」  
「承はるところ、水戸左中將様、天主へお越しと聞きます、一層忠義のお方から左中將様へ願ひ  
遊ばしてはどうでござりませう、御家考方のお力に及ばぬ事も、左中將様の御威光なら出来るかも  
分りませぬ」

「これ大きな聲をなされますな、その様な事があのお方のお耳へ入つたらそれこそわたしどこまで  
人間庫へ入らねばなりません」

「桑原々々、こゝへは雷の落ちぬやうに願はねばなりません」終ひには一同が口を抑へる。

長局の盡きる所を左へ曲つて寒竹を主とした瀟洒な庭を控へた座敷が一國女の部屋であつた、今  
朝お暇を給はつて御前を下ると、沐浴して引籠る、江戸の高田御殿に在す奥方の御居間にても、こ  
れ程にはあるまじと思ふ程の調度、敷寄を極めた結構、掛物から置物、芍薬と百合とを活けた花瓶  
まで一つとして名器ならぬはない、一國女は錦の褥に坐つて青磁の香爐で香を聞く、そのよい香り  
が袂の隙から漏れて次の間かの廊下まら覆郁と、花の世界へ行つたやうな心地であつた、多門は間

の袂を開ける、腰元

「小山田様御入來」と披露する、一國女は香爐から身を離して

「おゝ多門様、よういらせられました、まづこれへ」

と應鷹に云ふ、多門は躊躇入つて、

「今朝御前よりの仰せつけ、御方御機嫌よろしからぬにより例の御馳走を参らせよとござりまし  
た、よつてそれぞれ用意致し、いつもの御座所へ御出まし遊ばしませ、いつにてもよい色を御目に  
かけまする」

斯う云つたら、すぐにも笑顔を見せるであらうと思ひの外、一國女は頭を振つた

「いえ、わたくしは参りませぬ」

(六〇)

「そりやまた何故でござります」と多門は云ふ

「お約束が違ひます、わたしはそれほど小さい色を見たら思ひませぬ」と一國女は横へ出る。

「はて、どういふ御約束を致しましたかな」

「もうお忘れでござりまするか、わたくしはよく覚えてをります、今明日のうちには小栗忠八殿に  
 伝附け何か變つた御趣向をなさる筈と聞いてをります」

「その事でござるか、さてよく御記憶、今更ながら感服の外ござり申さぬ、しかし彼の儀用  
 意に暇取り只今すぐに行行ふ理にはなりかね申す、翌日まで御猶豫なされませ」

「それを樂しみにお待ち申します」

「然し御機嫌に雲がかゝつては御前のお心が濟みませぬ、此の方用意の整ふまでお機嫌罷はしくお  
 待ち下さらねばなりませぬ」

「明日まで待ちます、それに相違ござりませぬか」

「多門刀にかけて御約束、決して相違仕らぬ」

「さらば御用意お怠りなく爲されませ、それに違ひなくば御前のお心を悪う致すやうな氣色は見せ  
 ませぬ」

多門の趣向といふは小栗忠八の如き老巧の手練者に命じて、先日以來人間庫に押込め置く四十餘  
 人の老若男女を引出し、一刀の下に斬殺さうとの目計であつた、一人二人の制敗にては一國女が心

から喜ぶ様がないので、一時に死骸の山を築き、血潮の海を漂よはせて、それを慰みに供へやうと  
 するのであつた、一國女は薄々その事を知つてゐる、彼女は一期の思出として、早くその大趣向が  
 見たかつた、その場凌ぎに一人二人を切殺して當座の笑ひ顔を見ようとした多門の口上に反對した  
 はそれが爲めであつた、そこへ忠直からの迎ひが来た、多門は明日の用意に従ふべく出て行つた。

「御前お待ちかね早や、御出でなされませ」迎ひに来た中筋は頻りに催促の言葉を放つ、一國女  
 は腰元の手を措りて新しい粉裝ひする、薄雲を張つたやうな鬢、今朝の雨に開き初めた櫻の花を  
 見る様な顔、羅の着物、透き通るやうな雪の肌、装ひ新になつて静々と部屋を出づる、その美しさ  
 は何に例へんやうもない、水に映る夕日の影、朝日をうける雪の色、それらも今の一國女の美しさ  
 に比べては物の數でもなかつた、彼女の通る所は彗星の尾を引いたやうな光明をみとめる、彼女  
 の過去つたあとには得ならぬ香りが流れる、もし彼女の心に紅い血汐を好む残忍の氣質がなかつた  
 ら、誠に天女の粧ひである、腰元と中筋とに助けられて忠直の前に出ると、忠直の胸が一時に明る  
 くなる、同じ酒ながら一國女の酌で飲むと否とはその味ひに雲泥の相違がある、忠直は昨日今日一  
 滴の血を流したやうでもないのに、一國女の顔色が勝れて美しいのを見ると何者にもかへ難い喜び

が胸に湧いた、酒宴は益々盛む。

天主閣の上では光圀主従が一日の日の永さに苦しむ、今にも多門から忠直對面の報せが来るかと待つが、そんな素振りも少しもなかつた、晝も過ぎ末刻も過ぎはや暮近くなる、最初は馳走役や座興の役者が大勢伺候して恰度貴賓に對する待遇を見せてゐたが、今朝の食事が終つてからは一人去り二人去りして遂に誰れも居なくなつた、唯天主閣を下りた所に三人の茶坊主と一人の役人とが詰めてゐるばかりで機嫌を伺ひに来る者すらない、格之進は怪しからぬ事に思つて、一層奥御殿へ踏込まれてはどうでござります。と勧め云ふが光圀は首を振つた。

「三河守殿を苦しめに來たのではない、當城の危急を救ふために來たのである、すれば理不盡に禮を缺いて先方の心持を悪くするは好まぬ、殊に廊下の隅や間毎の蔭に屈強の武士を忍ばせてあつたやうだ、つまらぬ争ひから當家の家人に疵をつけるやうな事あつては、折角の苦心も水の泡となる、今日猶豫、明日となつて猶三河守殿お目通りを救されずばその時こそは我等手にも及びがたい、助三郎に足勞を頼むか、又は我等江戸へ立歸りて、將軍家お聲がかりを願ふか、何れとも決定致す覺悟ぢや、まづぢつとして彼等の仕方を見やうではないか」

斯ういふのが光圀の主張であつた、格之進も心を抑へてその言葉に隨ふ外はない、夕餐の膳は茶坊主が運んで來た、馳走は一汁三菜、昨夕の饗應とは比べものにならぬ程粗末であつた。

(六一)

その夜も天主閣の上で寝た。

「千代様、千代様」

吉崎御坊の夜中の鐘が寂しくなる、光圀は呼ばれてふと眼を覺ました。

「助三郎、まだ眠まぬか」

「何んとなく気がより一睡も取れませぬ」

「何故ぢやの」

「あの聲を聞かせられませ、八寒地獄の叫喚は聞いた事ござりませぬが正しく彼の聲に似てゐる事と思はれます」

光圀は耳をすまして聞く、遙かの下界に何とも云ひ知れぬ物凄いの呻吟が起つて、風のまにまに吹上る、その聲が耳底に沁み渡ると、光圀は覆えず身震ひして、悄然と立上つた、格之進も奥兵



衛も續いて起きる。

「何様哀れな聲ぢや、腸を絞る聲ぢや、地の底から起つて又地の底へ消えて行く聲ぢや、三河守殿御耳にあの聲は響かぬと見ゆるのう」

光圀は立つて窓を押し開ける、一輪の月空にかゝつて若葉の風涼しく渡る、萬籟寂として露の落ちる響きもない、その間に啾々として鬼の泣くやうな聲が起る、その聲は鋭い針の如く深く胸を刺す、助三郎は凝と聞いて

「あの聲は人間庫から起るのでござります、拙者親しくあの中へ押込められて目のあたりあの様を見、あの聲を聞いてござります」

「若し明日に迫る運命と知つた者があつたら、何のやうに嘆き悲しむであらう、さうしてその聲がどんな響きを持つて人の身へ迫るであらう、この聲は明日亡びて行く一刻の間の命から出る響きでござるぞ、ようお聞きなされ人の怨みの奥底からあの様な聲が出る今亡びて行かうとする人の身の聲はあれである」

格之進も與兵衛も生きた心地はなく頭垂れる、光圀は嚴として

「わしは何のために此處へ来たであらう、山海の珍味に飽かう爲めではなかつた、柴田勝家以來山緒のある天主臺へ上つて四方の景氣を賞玩する爲めでもなかつた、徒らに人間庫の恨み聲を聞いて、時の過ぎるに任せる爲めでもなかつた、わしは三河守殿の亂行を諫める爲めであつた、罪なくして極刑に處せられる孝子貞婦を助ける爲めであつた、それにわしは斯うして天主臺の上になつて空しく怨嗟の聲を聞く、それでは此處へ来た甲斐がない、もし三河守殿に對面せぬうち、恐ろしい運命が、彼等の上へ落ちて行つたら何んとせう、知らぬうちには是非もない、知つて善道へ導き得ぬは我等生きての恥辱である」と沁々云ふ

「わたくしにお暇を下さりますせ」助三郎は思ひ込んで云つた。

「暇を呉れとは……」

「案内は知つて居ります、わたくしは彼の人達と共に人間庫の闇に埋められて行く運命に繋がれて居りました、同じ庫に繋がれ、同じ運命に捉へられながら、手段を以て唯一人助かつたのでござります、他の人々を見殺しにするは道でない、唯今より彼處へ駆け行き、番人を切殺して無幸の人達を助けたいと思ひます」

「よく云はれた」と格之進は喜んだ。

「貴殿一人はやらぬ、我等もお供、生死を共に致し申さう」

光圀は黙つて考へた、奥兵衛は驚いた顔をして

「無謀々々、左様な無謀な事がならうか、御前當城へ御入らせに就き、それ〴〵手配を致し居る事、

多門の口上にて分明、左様な所へ乗込み一命を無駄に捨て、後が何になると思召す、第一御前の御

守護に當る者が無いではござらぬか」

「其處もござる、あゝ其處もござる」と格之進はホツと息する。

「よくお考へめされ、人間庫へ押込められた人達は、この世からの地獄、不憫ではござれど前の世

の約束、因縁事と断念るより外はござらぬ、その因縁者を救ふために左中將様の御身に御難儀が罹

つては相成らぬ、第一最初の望みが人間庫へ押込められた人々を救ひ出す爲めではなく、三河守様

の御亂行を御諫め遊ばす爲めではござり申さぬか、幸ひに命あつて明日まで生き延び、三河守様御

改心に逢ひ奉らば彼等の命も自然に助かる末を遂げる爲めに本を崩すのは道でない、御辛抱なさ

れ」



と事を分けて引止めた、助三郎も格之進も、それを振切る言葉もなく、勇氣もなく、人間庫の呻吟聲を遠くに聞いて徒らに胸を痛めるばかりであつた。

(KIN)

その中に夜が明ける。

一汁一菜の疎未な膳の朝餐を終ると、そこへ月岡養以が出て

「左中將様へ申上げます、三河守様御不例、殊の他御快方に向はせられござるにより、今日正未刻

より御對面あらせらるゝ旨、只今御披露なさせられた、左様御承知あらせられ」

「使者大儀であつた」と助三郎はまづ云つたが續いて「三河守様御病氣御全快とあるは何よりも重

疊、一應御前へ御披露仕る」といつて光圀の方を向いて

「只今聞かせらるゝ通りでござります」

光圀は満足の色を浮べ「さらば今日の未刻を待つでござらう」

養以はすぐ引下る。

「時節到來致してござります、今日御日通りに相成れば其場に於て御改心あらせらるゝやう、御諫

言遊ばさねばなりませぬ、併しこれ迄思ひ亂れさせ給ふ三河守様、一應二應の御諫言にて御納得あらうとは思はれませぬ、御如才はござりますまいが、一言にして骨を刺す御口上、これが専一でござりませう」

「元より命懸けぢや、萬一聞入れない時は刺違へて死ぬだけの覺悟なくては、怒ひ口を開く理にも參らぬ、その時は後々の事よきに頼むぞ、兄上に若君御誕生の旨聞いたので心強く意見がなる、我等もし此儘一命を捨つる事あつても、水戸三十五萬石の世嗣は、兄上若君に由つて定まる筈ぢや」  
光圀は深き意味を籠めて云つた、兄を乗越えて家督相續の地位に坐つた心の煩悶はこの時まで退かなかつた、光圀が死を恐れず、家の爲、國の爲め、命を賭けて忠直の亂行を諫めんと覺悟した心の底には、夫等の遠慮も潜んでゐた。

光圀のこの一言を聞いて、一座は言葉もなく頭垂れた。

「我等身上に萬一の事あつた時は、一方に血路を開いて速かに江戸へ歸れ、そして當城の有様を中山備前守へ明細に知らせよ、すれば大事に至らずして落着を見る喜びあらう」  
「心得てござります」とは云つたが誰れの心にも、光圀の大難を後にして阿面々々江戸へ歸る心はなかつた。

なかつた。

そのうちに時が立つと、庭内か俄かに物騒がしくなつて來た、殺氣が廣い庭の木々に漲る、松や楓や柏の木が生ひ茂つた前栽の彼方此方に多くの人が右往左往するを、助三郎は見た。

「何んでござりませうな、俄かにお庭の中が騒がしくなつて參つたやうに見えます」  
光圀は儼と見て

「何か事がありさうぢや、頻りに殺氣立つて見える、油断なく致せ」

天主間から下までは大分の距離がある、ざは／＼と人聲も聞えるが髓には分らなかつた、光圀を始め一同か凝と見てみると白綾で襷を取り同じ布で頭巻をした古武士が袴の股立を高く取つて、白鞘の一刀を引下げ、悠々と現はれる、あとから屈強の武士が十數人列をなして進む、其様常ならず見えた。

「不思議々々、お奥のお庭へ彼様な者が立入らう筈ござらぬに、今日に限つて此の事あるは容易ならぬ儀と存ずる」

奥兵衛は驚きの眼を睜る、格之進は煌々と眼を動かして

「拙者今より様子を見届け参らうか」と云つてすぐ立たうとするを助三郎は引止め  
「先づお待ちなされ、概略の模様を見定めた上で魚くでは、迂闊には参られまい」  
「や、彼れへ依を持つて参る、刑場を築く爲らしい」  
與兵衛は眞青な顔をして

「まさしくお仕置があると見える、一國女の笑顔見たさに例の恐ろしい御制敗が始まるのちや、左  
中將様、目の前に地獄が現はれます、あゝ何としやう、三河守様の御罪科が更に幾段重くなる」と  
云ふうちにはらりと涙をこぼす。

光圀は瞬もせず見てゐる、と合圖の太鼓が二つ鳴る、後園の木立に屯してゐる鳩がパツと立つ  
て幾度か輪をつくりながら東の山へ去る、十數人の武士が一齋に上下座したかと思ふと、その前裁  
へ面した座敷の縁の簾が上がる明放した障子の中に、忠直と一國女の姿が見える、その末座に五六  
人の腰元がわな／＼と震うて控へる。

「まさしく御制敗ちや、まさしくあれに地獄が現はれる」と與兵衛の齒は根も合はぬやうに云ふ。  
此の時第二の太鼓が鬱々と鳴響く、一國女は縁端近くへ現はれる、腰元二人錦の袴を持つて運ぶ、

と其上へむづと坐つた、忠直も同じやうに進み出る、山海の珍味が前へ並ぶ、玉の盃が手に受け  
られる、何共見る目痛しき様であつた、一座は頻りに眉を蹙める  
合圖の太鼓に連れて一人の男が打情れた様をして刑場の上へ引かれた。

(六三)

「遠目なればよくは見えぬが人間庫で顔を見知つた囚人ちや、いよく制敗を受くると見ゆる」助  
三郎は兩眼を潤ませて云ふ、與兵衛は見るに堪へぬ如く顔を背ける、光圀と格之進とは瞬きもせず  
見詰めてゐる、太刀取が鞘を拂ふ、白刃が陽に映つて煌々と光り輝く、與兵衛は、一旦そむけた顔  
を再び刑場へ落したが、

「太刀取は忠八ちや、正しく小栗忠八ちや、あの老人何として斯様な御用を承はつたのか、不思  
識々々」と惘れ云ふ。

役人の頭立つた者が罪狀の次第を云ひ聞けるやうな様が見えらると、二人の獄卒は左右の手を取つ  
て引出す、太刀取りがヤツとかけた聲の下、白電空を切つたかと思ふと囚人の首は落ちて、泉の如  
き血汐が滾々と流れ出る、それを見た一國女は花の蕾を見るやうな肩を開いて嫣然笑ふ、忠直が

六十八萬石を取換にしても見たしと願ふ笑顔だけあつてその美はしきは言葉にも筆にも盡されぬ、忠直は手に持った盃を取落すまでに見入る、光圀の眼には、それが悪魔の戯れの如く映つた。させる罪もなくさせる科もなく、むざむざと命を失ふ囚人の血汐を見て嫣然笑ふ女も女なれば、その女の顔を見て喜び興ずる忠直も忠直である、骸から流れ出る血汐が悉く盡きたかと思ふと、その骸は獄卒の手で運び出れる、與兵衛はこの無惨な所業を敢てして少しも自分を顧る様のない舊主の物狂はしい所業を、光圀が何と見るであらうかと情なかつた、太刀取が血に汚れた白刃を洗つてゐると其處へ又新しい囚人を連れて出る、年は五十餘りの老女、跣足と刑場の上へ突出されると、倒れるやうに跪づいて忠直の方を向き、瘦せた手をびたりと合せて伏拜むのは無惨な制敗から助からうとするらしかつた、光圀はその様を見て齒を切歯り堪へ忍ぶ。

「あれも切られるのぢや、あの老女も一國女の酒の下物にされるのぢや」

與兵衛は息も詰るやうに云ふ。

「見ては居れませぬ、斯る無惨な様を見過すは人間ぢやござりませぬ」格之進は云ふより早く立上つて段階下を下へ下りんとする、そこに林求馬を始めとして屈強な武士が一ぱいに詰めてゐる、求馬はそれを見ると、

「何れへ御越しでござります」と尋ねた。

もし理不盡に下へ降りて行かうとしたら、多勢を恃む武士が八方から取巻いて白刃の切先を差しつけるのを躊躇しない様子が見えた、格之進は命を惜むのでもない、その威勢に恐れたのでもない、思はずも一足下つた。

「いや何れへも参らぬ、然し貴殿等左様に大勢、何事を召されあるのぢや」と反問した、求馬は口元に冷やかな笑を浮べて、

「御客人を守護し奉るのぢや、御城内に不時の御制敗ござるにより、萬一の變を推量つて、此所に相詰め守護仕るのぢや」と云つた、格之進は強ひて下へ下りやうとしたらどんな結果になるも知れぬと思つて元の天主閣へ駈け上る。

「格之進彼れを見い、今の老姿もはや冷たい死骸になつた」

光圀は痛々しきうに云ふ、助三郎は両手に汗を握りながら、

「あの者どもは皆顔見知りぢや、人間庫で出合ふた者ばかりぢや、助けたい、助けたい、格之進、

共々参り呉れぬか」

「いや」と格之進は頭を振つた。

「彼等に左様な抜目があらうか、我等の助勢それに及ばん事を恐れて此下に屈強の武士數十人詰めて居る、命を惜むわけでもないが、若し刃傷に及ぶ時は危害忽ち千代様の御身に及ぶ、それを存じて引返し参つた」

「左程までに」と助三郎は齟齬みをする。

「すると此の淺ましい有様を眼の前に見ねばならぬかのう」と光圀は沈んだ聲で云ふ。

「あゝ何の因果で此の様な無様な様を見ねばならぬのでござりませう、私に此備命の絶えるのを願ふ他ござりませぬ」與兵衛は遂に泣き出した。

其うちに忠八は三人切り五人切り十五人切り二十人切る、刃の冴え、腕の冴えと相待つて、物の美事に首を切る、流れでる血汐は刑場を紅の池と漂よはせ囚人の上げる、悲鳴の聲は宛然魔の如く中有に迷ふ、一國女の顔には絶えず笑顔の露が流れる、忠直は流石に刑場の上を見る勇氣はなく一國女の笑顔のみを見て、盛んに盃を上げてゐた、如來の如き慈悲を持ち、神の如く正道を踏ま

(六四)

ん事を願へる光圀が、すぐ眼の下にこれ程の惨状を見る、その心はどのやうであつたであらう、太刀の閃めく毎にその肝は消え、首の落さるゝ毎にその胸は潰れたのである。

光圀はつくづく思ふ。

「彼等罪の無き囚人の魂は如何なる所へ落着くであらう、彼等無惨の刃の下に命を落す靈魂は何時如何なる場合に成佛するであらう、彼等は定めて三河守殿を怨んで居よう、白刃を閃かす小栗忠八とやらを怨み思つてゐるであらう、いや、彼等の怨みは三河殿や忠八の上には至らず、直に一國女の上に灑がれるであらう、死んだ者は是非がない、要は其靈魂を慰めるにある、この天主臺の上にて彼等が無惨の刃に亡びて行く様を見るのも、前の世からの因縁であらう、不幸にして彼等の命を助くるには至らなかつたが、せめて死後成佛の道を圖つてやりたい、夫にはどの道を取つたものであらう、三河守殿に勸めて千僧萬僧の供養を營むか、いやそれでは浮ぶまい、彼等の靈魂は當城の礎定まり三河守殿の亂行改まる時、始めて安堵するであらう、それは一國女を退治するにある、六十八萬石の家來幾萬人ある中で、一人二人の忠義者あらば、高の知れた女一人、討取

るに手間は入るまいを、今日迄その事なきは、多門の悪心全家中を毒し居る爲であらう、多門を誅伐すれば黒雲忽ち開き、一國女を退治すれば三河守殿迷ひの夢すぐ醒めやう、彼等の冥福は一國女の滅亡に出つて替まれる。」

「救せ、お身達死して光圀を不甲斐ない者に思ふであらうが、此場の成行如何ともせん方ない、お身達の靈魂まだ中有に迷つてゐるうち、お身達の敵、一家中の敵、我々一門縁者の敵、一國女を亡き者に致しくれるぞ、暫く我慢してくれようぞ」と心の中に詫を云ふ。

そのうちに忠八はまた五六人を切殺した。

「それで二十七人切り申した、彼の小栗忠八は大阪御陣の時、抜群の働きをした古武士でござります、まさかの時はお家の爲めに一塵の御用にも立つべき器量を持ちながら、こんな時に引出されてあつたを振ひ申す、君命是非なく仰せには従ひ居れど、定めて不甲斐なく心に泣いてゐるでござらう」

與兵衛はさも悲憤に堪へぬ如く云つた。

「二十七人、あの太刀取唯一人で二十七人まで切り申したか、如何さま勝れた腕前、あの心に少し

でも忠義を思ひ、主君の御爲め命を捨て、御諫言申す心あらば、後々の鑑もとなる立派な武士と呼ばれ申さうを、腕に覚えのみあつて、心に何んの義心もない、ほんの寶の持腐れ、可惜武士でござらう」

助三郎は忌々しさうに云ふ。

「今度は二十八人目ぢや、何者が制敗に遇ふでござらうな」

格之進は刑場に眼をそゞぐ、與兵衛は早くも見て

「懐妊女ぢや、彼をお見やれ、可憐げな懐妊女ぢや」

と痛々しげに私語く

「何、懐妊女と仰せか」と斯う云つて助三郎はじつと見る。

それは西澤屋の嫁お磯であつた。

「や、西澤屋の嫁ぢや、絹笠屋の娘ぢや、いよ／＼命を取られるのぢや、憐れ／＼斯程までに命乞を願ふた甲斐もなく、やはり一國女の下物になるのぢや」  
助三郎は腹を斷つ思ひで云つた。

あはれお磯は踏む足も地に着かずとぼく／＼と引かれて来たが刑場へ引張り上げられると共に、わ  
つと聲をあげて泣き出した、心なき役人輩も、その憐れな様を見ると、一時に顔を背ける、無惨な  
仕置に馴れた眼にもよく／＼憐れを感じたらしい、お磯は一國女の方を向いて白い手を合せる、一  
國女は素知ぬ顔をして横を向く、次には忠直を拜む、忠直は見つめて見ぬ振をする、次には太刀取りを  
拜み、更らに役人一統を伏拜んでは、己れの腹を指した、悲嘆に咽喉を塞がれるので、もう言を  
云ふ事も出来ぬ、たゞ爾した仕方をして腹の兒を助けられたく願ふのであつた。  
『神はないか、佛はないか、天道は盲目になられたか、助けたい助けたい、あの憐れな女が助けて  
やりたい』

助三郎は地駄太を踏むやうに云つた、されど一國女は微塵も慈悲はなかつた、夜叉のやうな彼女  
の心は、忠八如き古武士を鬼にさせ、十数人の役人を魔界へ導く、忠八は血に飽いた刃を振上げる、  
お磯がともすると逃げやうとするので二人の獄卒は両手を取つて俯伏せに抑へ付ける。

あはやお磯の命は自刃の切先から滴る露と共に消えやうとした時、  
『御上使、御上使、御上使の御入來でござるぞ』と大声に呼ぶのが聞こえた。

(六五)

光圀は耳を立てる、『御上使と云ふた、はて上使と云ふた、何事であらう』

その間もなく忠直はズツと坐を立つ、一國女は物に隠はれた如く倒れかゝるを、腰元共が左右か  
ら助けて引取る、太刀取の忠八は惘れ顔に立つて居ると多門が顔色變へて飛んで出で

『今日の制敗はこれにて中止ぢや、残りの囚人は盡く元の牢へ繋ぎ置け』

助三郎は始めて胸を撫で下した、既に組の上へ乗せられたお磯は、危く一命を助けられて刑場か  
ら引下される、庭の内に詰めてゐた多くの役人等は蜘蛛の子を散らすが如く姿を消して、後には南  
風が吹き渡る。

『合點行かぬ、何事が起つたのであらう』

光圀は不審の眉を寄せた。

『御上使とござりました、お江戸から御役人衆がお下りと見えまする』格之進は小氣味好げに云つ  
た。

『もし三河守様御亂行の事聞えて問罪の使者を御遣はしなされたのではござりませぬか』奥兵衛は



まづその事を案じ云ふ。  
 『或は爾うかも知れぬ、何れにしても一通りの儀ではあるまい、何はさておき、それに依つて無惨の制敗中止となり、懷妊女の一命助けられたは何よりも重疊、天道の御眼はまだ顯かであつたと見ゆる』と光圀は満足げに『暫らく様子を見ると致さう』  
 云ふ時すぐ下の間に詰めて居た武士が一時に驅け下りるらしき物音が聞え出した、お庭の中を往來する人々の顔に、心配の色が漂つて、刑場の血汐の上に立つてゐた殺氣が取れると、後には恐怖の氣が一面に流れ出た、格之進は段階を下りて行つたが程もなく上つて来て、  
 『一人も居りませぬ、先刻までは林求馬とかが差配して驚破と云はば我々に白刃を向けやうとした大勢の武士、今は一人も居りませぬ』と報告した。  
 『さらば此方より押掛け、御殿の様子を見届けやう』  
 光圀は覺悟の體で立上る。  
 『いで御案内、斯う來らせられ』與兵衛は先に立つた。  
 光圀の心では、もし江戸表から公儀役人参りでもしてゐたのであつたら、すぐ對面、それと心を合せて、忠直へ諫言をしやう心であつた、忠直の亂行將軍家の耳へ入り、お咎の使者にても遣はされたのであつたら、何とかして緩和の手術を取つて、三河守の爲め一言の云譯にてもしてやりたと思つた、天主閣から出て、庭傳ひに刑場の設けられてあつた前栽近くへ來ると、二十七人の死骸は裏庭に山と積れてあつた、女もあれば男もある、若いもあれば年老いたのもある、何れも無惨な様ではあるが、その入口に表はれた刀の冴えは如何にも見事なものであつた、主従思はず立止まつて、彼等の爲めに冥福を祈りながら刑場へ近づくと、血腥さい風が吹き満ちて、青葉といふ青葉に血汐の色がかゝつてゐる、誰れの眼にも二度とは見られぬ悲惨な様子を、女の一國女が樂しと見る心の中の恐しさが思はれて、一同が戰慄した、そもそも一國女は人であらうか、鬼であらうか、何んの願ふところがあつて人の忌む血汐を見るを好むのであらうか、と光圀は深い不審に打たれたが、暫く茫然と立つてゐた、その邊りの奥勤めの武士が二三人も彼方此處して不審さうに光圀主従へ眼を注ぐが、誰も咎め立てをする者すらなかつた、全體なら見ず知らぬ武士が四人まで奥庭へ入込んでゐるのであるから、一言二言の咎め立てはする筈であるのに、其事もなく行過ぎる、それを見ても城内の紀綱の緩んだのが推量される、更らに差迫つた大事件の湧き起つてゐるのが思ひやら

まづその事を案じ云ふ。  
 『或は爾うかも知れぬ、何れにしても一通りの儀ではあるまい、何はさておき、それに依つて無惨の制敗中止となり、懷妊女の一命助けられたは何よりも重疊、天道の御眼はまだ顯かであつたと見ゆる』と光圀は満足げに『暫らく様子を見ると致さう』  
 云ふ時すぐ下の間に詰めて居た武士が一時に驅け下りるらしき物音が聞え出した、お庭の中を往來する人々の顔に、心配の色が漂つて、刑場の血汐の上に立つてゐた殺氣が取れると、後には恐怖の氣が一面に流れ出た、格之進は段階を下りて行つたが程もなく上つて来て、  
 『一人も居りませぬ、先刻までは林求馬とかが差配して驚破と云はば我々に白刃を向けやうとした大勢の武士、今は一人も居りませぬ』と報告した。  
 『さらば此方より押掛け、御殿の様子を見届けやう』  
 光圀は覺悟の體で立上る。  
 『いで御案内、斯う來らせられ』與兵衛は先に立つた。  
 光圀の心では、もし江戸表から公儀役人参りでもしてゐたのであつたら、すぐ對面、それと心を合せて、忠直へ諫言をしやう心であつた、忠直の亂行將軍家の耳へ入り、お咎の使者にても遣はされたのであつたら、何とかして緩和の手術を取つて、三河守の爲め一言の云譯にてもしてやりたと思つた、天主閣から出て、庭傳ひに刑場の設けられてあつた前栽近くへ來ると、二十七人の死骸は裏庭に山と積れてあつた、女もあれば男もある、若いもあれば年老いたのもある、何れも無惨な様ではあるが、その入口に表はれた刀の冴えは如何にも見事なものであつた、主従思はず立止まつて、彼等の爲めに冥福を祈りながら刑場へ近づくと、血腥さい風が吹き満ちて、青葉といふ青葉に血汐の色がかゝつてゐる、誰れの眼にも二度とは見られぬ悲惨な様子を、女の一國女が樂しと見る心の中の恐しさが思はれて、一同が戰慄した、そもそも一國女は人であらうか、鬼であらうか、何んの願ふところがあつて人の忌む血汐を見るを好むのであらうか、と光圀は深い不審に打たれたが、暫く茫然と立つてゐた、その邊りの奥勤めの武士が二三人も彼方此處して不審さうに光圀主従へ眼を注ぐが、誰も咎め立てをする者すらなかつた、全體なら見ず知らぬ武士が四人まで奥庭へ入込んでゐるのであるから、一言二言の咎め立てはする筈であるのに、其事もなく行過ぎる、それを見ても城内の紀綱の緩んだのが推量される、更らに差迫つた大事件の湧き起つてゐるのが思ひやら

れる。

別に案内する人はないが、その縁側から上へあがつた、今迄一國女と忠直とが樂しみ興じてゐた酒宴の跡が狼籍として残る、冷えきつた盃の酒、荒て果てた膾、焼物、それらが當家の未來を暗示する如く淺ましく見えた、間毎を越えて廊下へ差かゝると彼方から狼狽顔をした茶坊主がやつて來た、それは與兵衛の顔知りであつた、與兵衛は「これ〜」と呼んで「三河守様は何うなされた、江戸から御上使がお出でと云ふ、眞實か」と問ひかけた。

(六六六)

「眞實でござります」といふ茶坊主の聲は慄へた。

「いよく眞實、して、誰様お入來ぢや」

與兵衛は重ねて問ふ。

「清涼院様でござります」と茶坊主は答へた。

光圀は斯くと聞いて茶坊主に聲をかけ

「清涼院殿が御上使としてお出でなされたか」

「御意でござります」

「はて清涼院殿が公儀よりの御上使として御下向か」と獨語のやうに云ふ、助三郎は傍から

「清涼院様とは三河守様御生母ではござりませぬか」

「いかにも左様ぢや、御先代秀康公の御側女世に岡山殿と申すお方、中川出雲守一元の女儀と聞く男優りの氣質さうな、されど公儀役人数ある中で、清涼院殿を大切の使者に御遣はしなされたとは

合點參らぬ、兎も角三河守殿お目に掛れば分明致さう、何れにお出ぢや」

「はッ」と茶坊主は狼狽する、與兵衛は叱り付けるやうに

「水戸左中將様ぢや、一昨日御登城なされて以來、天主閣の上にお出でのこと、三河守様御存じの

ないことはあるまい、其儀委曲に言上致せ」

「は、は」と茶坊主はいち〜畏まつて驅けて行つた、程なく、月番家老吉田修理が出て光圀一行

の前に兩手をつき

「此頃來の無作法、平に御用捨あらせられ、今日正八ツ刻主人御對面申上ぐべく御約束申上げ居り

ましたところ、思ひがげなく公儀より上使御入來、それこれ取込み罷り居りますので、當座御免、暫時何れかにて御休息の儀を願上げ奉る』

常には六十八萬石を二つの肩に脊負ふ程に自らも思ひ、人も許して居た吉田修理も、お家の大事に際しては殆んど魂も身に添はぬ程狼狽してゐた、光圀は同情に堪へぬ如く

『心中推察致す、然し御上使清涼院殿は三河守殿お腹と聞く、勘辨の御沙汰もあらう、何れかに休息、お家の成行を待つ筈なれど、我等三河守殿とは肉身の従弟、一門の端に連なつて御當家の危急存亡を餘所に見る心はない、苦しからずば同席を許されたい、清涼院殿へ尋ね呉れぬか』

『御意なれど、此儀御許容はあるまじく推量仕る、清涼院様御齋せの御川容易ならぬ儀と推量致す、旁此度の儀落着致しまするまで、お控へあらせらるゝやう願ひ上げ奉ります』

『其遠慮には及ぶまい、清涼院殿御言葉にて當座差控へ居るやうの御差圖あれば、いつ迄にても相待ち居るが、左様には仰せられまい、一應取次いで給らうぞ』

強つて云ふを否む言葉もなければ修理は狼狽とした態度で奥の方へ走せ去つた、光圀は委細構はず其後を追ふて行く、前栽の若葉は茂り合ひ、泉水の汀に咲いた花菖蒲は今を盛り縁の色を見す

れども何處やらに雲がかゝつて常見るやうな姿はなかつた、暫くそこに立つてゐると修理は再び馳けて来て

『只今清涼院さまへ御口上の趣委曲に言上致したところ、思がけぬ左中將様御出とは存じもよらず幸ひの折柄御同席給はらば此上もない喜びと、仰せられて御座ります』

『爾うあらう』と光圀は頷いた。  
『お身達はこれに控へ、清涼院殿お目にかゝり、上意の趣を承はつてから、我等は我等でお力添への道を考へる』

三人は畏まつて廣間に續く控所の縁座敷に坐を占めた、光圀は修理の案内によつて奥書院へ通る見ると正面上段の間に清涼院、年齢は六十の上を三ツ五ツ越えて、茶筌に結つた髪の毛も半ばは

霜を抽んで、燃えるやうな緋の一重、茶の名古屋帯を幾重を巻いて、其上から裏葵の模様を染めた水色の小桂を着て、懐の端から黄金造りの懐剣を覗かせてゐる、秀康逝去の後、三河守忠直、其

弟忠昌の生母として將軍家からも重く見られ、一門衆からの尊敬を受け、靜に操を守つて來た女丈夫の俤がその萎びた顔の何れかに潜んでゐた。

忠直は二の間に両手をついてゐる、光圀はズツと通つて忠直の向ひ側に座を占める、清涼院は一日見ると心持ち首を下げたが

「御上意を蒙り居りますので、上座は御免なされませ」と謙遜つて挨拶した、上使とある上は將軍家の名代、光圀も謹んで手をついた、忠直は無言、青ざめた面色、痾癖と不平とに慄へて座にも堪へぬ如く見える、清涼院はそれを押へつけるやうに

「いかに三河守殿、其許亂行將軍家御耳に入り、以ての外御立腹、實否を取糺し參れとの御上意に依り、上使として罷り下る、左様心得、謹んで有様を言上めされ」と云つた。

(六七)

三河守は無言、清涼院は光圀を見返つて

「いやのう左中將様、女の身で仰々しく御上使などと名乗り參つたは、わたくしの志ぢやござりませぬ、これには辛いわけがござる、まづ一應御聞き遣はされませ」と言葉を改めていふ、光圀は顔を上げて

「繊弱い女儀の身を以て、造々との御下向、並大抵の事にてはござるまい、御推量申上げる」

「御上表御沙汰にては、三河守殿御亂行との聞え宜しからず、問罪の爲若年寄の松平伊豆守下向の旨を承はり、近頃心外の至りと存じ、御取次を以て奥御殿へ願ひあげ、直々將軍家へ御訴訟、女ながら重き仰せを承はつて御當家へ參つたは、深く存ずる旨あつての事、まづお聞きなされませ」と一たん云ひ切つて「三河守様は御先代の御總領、かう申すわたくしのお腹を貸し奉つたお方、すれば他人にてはござらぬ、假し如何様の譯あつても、御家名に疵つけ、御先代様御名を御穢しなされては、子たる者の道立たず、且つは御一門の御恥辱、それを他人の伊豆殿御差配に任せるは、御先代様へ對し相濟まぬ儀と存じ、わたくしへ上使仰せつけらるゝ様、謹んで願ひあげ奉つたところが上様仰せ遊ばすには、其方女人と云ひ、且つは老體、大切の役目首尾よく果し歸らうとは存じかけぬ、申さば福井七十萬石の起伏にも係はること、老中の存じよりもあらうで、彼等差配に任せ置いてはどうぢやと仰せられた、そこを押返へしわたくしより願ひあげた趣意は、女ながら秀康様御位牌のお守り致し居りますので、わたくし一人では參りませぬ懐へは秀康様御位牌を同道、心には秀康様御靈を宿し、女ながら秀康様御臨終の砌、御記念につかはされた懐劍を所持致し、福井の御城へ驅け付けまする、然る上は一應二應、三應も諫言、御改心を迫り、首尾よく本意を達する上は、

御傍近くに在つて御奉公の道を忘れ、不行跡を御勤め申す奸物倭臣共を遠ざけ、顔立のみ美しうて心の恐ろしい御部屋衆に暇を取らせ、忠義の武士を引上げ、御諫言申上げた罪によつて家名斷絶の悲しみを見た人々の家を興し、子孫を召出し、七十萬石の御城内を三十四十年前の世に引返し、それを土産に歸府仕るべき旨申上げますと、上様仰せ遊ばすには、健氣な覺悟流石三河守殿お腹だけある、しかし萬一お身の申すを取用ひ致さぬ時は、如何様に致すぞと念に懸けて御問ひなされた、由つてわたくし申しまするには、さ、その時でござりまする、その時の用意に秀康様御形見の懐劍を所持致すのでござります、三河守様御行跡に見込なくば、他人のお手を借り奉るに及びませぬ、わたくしの手につけて御自害をお勧め申すか、又はお上御威光を首に着て即座に領地御召上げ、その御取柄きを仕るでござります、と御返答申上げました、すると上様もわたしの心を御推量遊ばされたと見え、この上使その方に申し付ける、よく致せ、と御意遊ばされた、丁度左中將様御出での折柄篤と御一覽遊ばされ下さりませ、三河守様御返答の模様によつては、その分では差置きませぬ、清涼院の言葉には丈夫も及ばぬ強い心が籠つて聞えた、光圀は深く感じて三河守の返答如何にと、見てゐる、と三河守は俯いた儘

『御上使へ伺ひます、先刻より仰せられた御言葉は側用人小山田多門へ御當遊ばされござるかな』  
『いかに』と清涼院は頷いて『只今仰せられた小山田多門、御先代様御存命の間は一向承はらぬ者でござります』  
『そりや當然多門は拙者取立て、側近く召使ふ者でござる』  
『それが御眼利き違ひではござらぬかの』  
『よし眼利違ひであらうとも、我等思ふまゝに仕る、彼に遣はしをる知行千五百石、役料二千石、合せて三千五百石、盡く我等所料の中を以て遣はしをる、誰方へも合力は仕らぬ』  
『いやさうはなりません、日の下の津々浦々は禁廷様よりの御委任に依つて、江戸將軍家御差配、御當家の七十萬石も、乃至は加賀殿の百萬石も、御先祖勳功によつて當座の所領にお遣はしなさる分の事、結局はそれによつてよき武士を養ひ、よい馬を飼ひ、立派な武器彈藥を蓄へ、まさかの時はおの爲め、拔群の働きを遊ばし給ふに外ならぬ、それにて御家のお爲めにならぬ奸物を召抱へ遊女に等しいお部屋を近づけ、御自身の榮耀榮華に耽らせたまふ御代に遊ばしては、正しい道に外れません』

「いや何んというても聞かぬ、左程正道を尊び給ふ上様が、何として約束を反古に遊ばすであらうかの」

「言語道断、上様が御約束を反古に遊ばしたとはな」

清涼院はきつと尋ねる。

(六八)

忠直の面上には不平の氣がサツと走つた、聲を慄はせ

「父秀康へ對し東照宮様百萬石遣はさるべき旨、御約束なされたとお聞きなさい事はござるまい、然

も父はそのお墨付を頂戴致さず、彼の世へ參つた、我等深くその義を存ずるにより大阪御征伐の砌

には生きて再び歸るまじき覺悟を以て、手勢を引具し城に迫つて一番槍をつけ申した、さしもの名

城、見る／＼うちに陥ち、秀頼公御生害、勇士の面々盡く命を落したは、斯く云ふ忠直必死の働

きによるところ、すればその功に免じ父秀康へ御約束遊ばした百萬石の御墨付を給はるが當然でござり申すに、其儀はなく御褒賞として初花の茶入一つを下された、我等は百萬石の御墨付を頂戴、

それにて父秀康の冥福を弔ひたく祈りこそしたれ、茶器骨董など御貰ひ申さうとは毛頭思ひ寄らぬ

事、天下諸公の頭立ち、忝なくも征夷大將軍を拜し給ふ東照宮すら時には御約束を反古になさる例もある、既に志を遂げる事ならず、生きて父へ孝養を盡し難ぬる上は七十萬石何んの爲にか致さう、命懸けの軍して忠義の士卒を惜しげもなく殺すは、恩賞の知行に依つて忠義の強者を養ひ、

まさかの時は御馬前の働き、それにて國士を守り家名を守り、且つは武士の道を全う致したい望みに外なり申さぬ、そこへ茶入如き器を頂き、何の役に立ち申さう、忠直亂世に生れ戦陣の中に人と

成り、風流の道は心得申さぬ故、頂戴の茶器を微塵に碎き、それにて決心を明かに致し申した、既に士卒を養ひに知行足らず、奉公の道を踏む心なければ思ふまゝに世を過して世に捨てられ、人に

捨てられた、甲斐ない身を草原に晒さうと覺悟を極めた、先年以來屢次諫言を受ながら、それに隨はず遂に將軍家へ御苦勞をかけるに至つた、此も忠直連命の極まる所、此上は潔よく御制敗を受くる

のが望でござる」

忠直は二十年來胸の底に鬱積してゐた不平を訴へた、それにも一面の理がないでもない、清涼院

は一面に同情の眼を時めながら、一面に忠直の心にかゝつた黒雲を拂ひ除けてやりたい母の慈悲を

見せて

「そりや御思召違ひではござらぬか、よし東照宮様御約束を遊ばされたに致せ、お上御都合で御變更遊ばすに何んの故障がござり申せう、七十萬石の御知行に不足があるか、第三家の隨一たる尾張様は六十一萬石、紀州様は五十五萬石、此處に在らせられる水戸様は僅か三十五萬石でないか、秀康公は御總領の故を以て七十萬石、恐れ多くも公方様に次ぐ御家柄と仰せられた、その御思召に對しても御知行に御不足などは仰せられぬが當然かと心得まする、よく／＼御思案なされませ、あなたの御不行跡から御先代様の御位牌に疵がつき、御一門衆の御名にも雲がかゝります、こゝにて御改心、奸佞邪智の悪人を遠ざけ、御家の守護第一に遊ばさば、上様に置かせられても御勘辨あらせられうと心得まする、左中將様も御同席、わしが悪い事は申しませぬ、正しい道をお踏みなされませ」と涙を流しながら云つた、忠直は無言、光圀は嚴かに口を開いた

「清涼院殿御言葉御尤もに承はる、誠にさもあるべきこと、御知行に不足あつて一身一家の大事を忘れたまふ事且以て其意を得申さぬ、宗家の安危、天下の大事に臨んで、命がけの戦場にのぞみ、一番槍を心がけるは武士の常、よし何等恩賞の御沙汰なくとも不平など抱くべきではあるまいと存じ申す、それを其許僻思召し、頂戴の名器を碎き、悪魔に等しい美女を近づけ、普代忠義の家來を

殺し、自暴自棄に陥りたまふは、全く天魔の所爲と見參らす、人間心の儘に働かば、當座の面白はござらうとも、後々それに幾倍した後悔が參るは必定、此處に御改心の實あがらば、御勘辨の御沙汰もあると申す、旁迷ひの夢を覺ましたまへ切に御諫言申し上げる」と云ふ。

此時忠直は血走つた眼に最後の覺悟を見せて

「我等生れつき人の情、憐みを受けるが大嫌ひぢや、今日まで行ひ來つた事に罪科籠り居らうとは思はぬ、一國の主として旨に違ふ家來を殺し、罪科ある民百姓を仕置致すが何故悪い、側女を置き目に叶ふた家來を登用、日夜酒を近づくるが何の不調法とござり申さう、我等仕方、俯仰天地に恥づることござらぬ、而かも其儀お上御氣に入らず御制敗の御沙汰あるに於ては、謹んで仰せに隨ふ分でござる」と強い聲で云ひ致つた。

(六九)

清涼院は斯程までに云つた事が我子の心を動かすに足りなかつたのを悲しむやうに「そりや非事、三河守様は其お手で御先代様の御位牌へ汚ない泥を塗らせらるる」

「ハ、ハ、ハ、」と忠直は狂氣したやうに笑つた。  
「何んぢや、泥ぢや、泥を塗ると仰せか、泥を塗らうよ、人の憐み情を受けて、生甲斐もなく世を送るよりは、泥を呑んで死ぬるが増しぢや、改心は仕らぬ、それが悪しくは如何様とも仕置めされ」

光圀は忠直の覺悟の動かし難きを見て、そいろに悲嘆の涙を流した、人の心も一端曲けると容易に元へは返らぬものと見えた、三河守殿大阪夏陣の砌、東照宮一言に勵まされ必死の覺悟を以て一番乗りをせられた時から、高慢の氣が胸に満ちた、幾多の大名、旗本、手をつけかねた大阪の城も我手にては陥さるゝ、此度の功名三河守第一と思ひ詰めたお心が遂に今日の禍をつくる因となつた、一寸の慢氣は百年の礎を危くする、慢氣から不平が生れ、不平から亂行が来る、其隙を悪魔、悪鬼が窺ひ寄る、百萬石の御墨附を反古になされた將軍家の御眼には、三河守御慢氣の影が映つてゐたかもしれぬ、慢氣に長じた者はそれからそれへ不足が出て、遂には其爲めに身を亡ぼす、七才萬石を不足と思ふ者は百萬石にも不満を抱き、段々と増長して遂に思はぬ慾望を出す事が屢ある、とてもかくても當家の運命傾く時が來たのである、一國女如き婦人が御傍へ參るのは、はや滅亡の

時機到來の兆、搗て加へて多門一味の不忠義者が信用を得るに至つては、當城の礎に大きな裂が入つたのである、波を防ぐ堤は造り得ても運命の大潮が滔々と押寄せるを防ぐべき道はない、壽命の盡きた鹿は獵師の砲口へ逃げて来る、神は既に三河守殿を見放されたのであらう、今は人間の力に及ぶやうはない、要は當家の後々三河守殿を見殺しにした後は、當家の血脈を細々にも繋ぎ行く方法を講じねばならぬ、腐れた腫物は深く切開きて腐れを除き根を取るが肝要ぢや、三河守殿は不憫なれど改悛の狀ないに於ては御上使の齎らせた處分に任せる外あるまい。  
扇を笏に坐を占めて深く眼を閉ぢながら考へる、然しもう一應諫言をする要がある、光圀はずつと出て

「三河守殿」と呼んだ。  
忠直はきつと見て  
「諫言は聞き申さぬ、我等覺悟を定めてござるわ」と甲走つた聲で云ふ。  
「貴殿も我等も、同じ東照宮様御血脈ぢや、先刻からの御口上、正しく悪魔の所爲と存ずる」  
「悪魔となつても、人の憐れみは受け申さぬ」



「邪魔ではない、七十萬石の御主ぢや、伊勢大神宮の御子孫ぢや、御目を覺ませられ、夜は明け申した、魍魎は影を潜めた、これからは人間の活動く時ぢや、元の人間にお復りなされ」  
光圀は力を籠めて云つた、されど忠直の耳へは入らない。  
「人間の屑にはなりたくない、七十萬石よりは心が大事ぢや、七十萬石が欲しさに心を曲げ事致さぬ」

清涼院は見かねたやうに  
「左中將様よく御意見下された、これに秀康公の御位牌を所持して居る、これにて骨身に滲みるほど御折檻遣はされ」  
斯う云つて懐から紫袱紗に包んだのを取り出した、光圀は受けて戴く。

(七〇)

忠直はじつとして居た。  
「これに御代様が在らせたまふ、これ此處に………」と光圀は秀康の位牌をさし付けたその手が靈に感ずる如く戦々震ふ、忠直は額越した一眼見た、孝顯寺殿何々の文字が顯々見える、光圀は涙

を流すばかりに聲を張つた  
「この戒名がお見えなされぬか、この御位牌に宿らせ給ふ秀康公の御靈を恐れたまはぬか、貴殿思召違ひの爲、家を失ひ妻子を失ひ、一家離散の悲しみを見たものが幾十人あると思召される、永見右衛門はお家に取つて容易ならぬ家統、波々伯部清左衛門は古今の義人、其下には貞婦あり、烈女あり、忠義の武士あり、家來がある、而も皆貴殿御亂行の犠牲になつて滅亡致す、その外人間庫とかへ入れられて、無残の命を落した者幾何あるか知れ申すまい、昨日より今日へかけ、我等眼の前に見た人数のみにても二十七人中には逃れ難き罪科の者もあらうが、又罪なく利なく加之に孝行貞烈、人の鑑となる良民もあつたであらう、それ等を一々斬罪に處せられ申した、それら無辜の者共、刃の下に倒るゝ時、如何に貴殿を呪ふたであらう、それ等の者の魂は此お城の内外に迷つて、子は親の爲めに、親は子の爲めに、萬劫浮ぶ時ない鬼となり申すであらう、御改心召され、御改心めされ、しかして一天の雲もかゝらぬ潔い心を持つて、無残に仆れた多くの人の後をお弔ひ得させ給へ、すればその功德によつて、これまでの罪科は消えて、御當家萬歳の礎定まり申さう、これに秀康殿在す、只今の口上、我等申すでない、秀康公が申されるのぢや」

忠直は斯程迄に云はれても猶無言の儘控へてゐた。  
 「三河守殿御分りないか」と光圀は重ねて云ふ。  
 「改心は致さぬ、幾度仰せられても同じこと、七十萬石の知行を握つて、此儘安穩に死なうとも思ひ申さぬ」

「その我執をお捨てなされ、光圀作州より都を経て、江戸へ歸る筈を、態々當所へ参つたは、貴殿亂行を聞きかね、將軍家御耳へ入るに先達ち、御諫言申上げたたく存じたからぢや、而も熱鐵に手は觸へかね、時節到來を待ちうけをるうち、取返しつかぬ一大事に臨み申した、貴殿亂行一時の御心得違ひに基く儀と存じ居つたが、内實は左にあらずして、東照宮御遺約を不満足に思召すためと承はつては、猶のこと御意見申上げねばならぬ、心の亂れた腹の底に重い覺悟ないから起る、心の不平煩悶は、心の敵を退治しかねる弱點に基く、心の敵を平ぐる者は、永久に平和が參る、人は父祖の業を受たぎ、父祖の家風を守り、眞直に人の道を踏み行くを第一の仕合せと仕る、貴殿既に秀康公の御知行をお繼ぎなされ、秀康公の御定めなされた御家風にお生きなされた上は、眞直に道を踏んで人間の仕合せをお受けなさるが當然でないか、清涼院殿御心中を察し給へ、秀康公の御名と

悪魔に等しき女と何れが軽く、何れが重いか、この分別が肝要ぢや、上様へ對し憐みを乞ひ申すのではない、武士としての責務、征夷大將軍の御名を畏みて、その仰せに従ふは、弓矢取る身の慣ひでござるぞ、拙者遙々當所へ参り、忠臣貞女の命を助くることを得ず、目のあたり二十七人の老若男女が同じ双に倒れゆくを見ながら、救助の道を盡しかねた代りに、貴殿御一人の心が助けたい、七十萬石の御知行が助けたい、御開入れ下され」

「捨て置かれへ〜」と忠直は手を振つて  
 「憚り乍ら我等人の情に救はれやうとは望み申さぬ」  
 「するとこの御位牌に不孝の血を塗らうとの御思召しか」  
 「七十萬石よりは戀が重い、一國女に別るゝはこの城に別るゝよりも悲しく心得る」  
 「あゝ」と光圀は投げけるやうに云つて  
 「三河守殿御心ははや腐れた、御先祖よりお受けたされた血は枯れて、悪魔が總身に宿り申した、是非もない事ぢや」  
 溜息の下から斯う云つて、秀康の位牌を清涼院の手へ返した、悪く覺悟を極めた忠直はどうとも

なれと云ふやうな態をして、謹みげもなく坐つてゐた。  
此時廣庭を隔てた新御殿に何んとなく女の聲が聞えた、續いて何をか罵るやうな聲もする、忠直はこれを聞くと浮々と落着きなく身を起さうとした、清涼院は躍りかゝる様に袖を押へて  
『お待ちなされ、申す事がござる』と引止める。  
新御殿では『お部屋様々々何れへ御越しでござります』と氣魂ましくよぶ腰元の聲が止んだかと思ふと、またオオ〜と聲立て、泣くのが聞えた。

(七一)

清涼院は懐から覗かせてゐる懐劍を右の手に持つて、忠直の傍近く寄り寄つた。

『この懐劍を御覽あそばせ、篤とお眼に止めて御覽あそばせ』

忠直は一目見た儘黙つてゐる。

『お覺えがござりますか、このお刀にお見覺えござりますか』

『知らん〜わしは知らん』と忠直は投げるやうに云ふ。

『いえ、御存じない筈はござりませぬ、秀康公御他界の御斯う申すわたくしへ御形見として遣はさ

れたを、お聞及びある筈でござります、その時の御遺言に秀康の魂は此刃に込めて置く、もし大事に迫つた時は、是にて災の根を切つて、家の名を清うせよと仰せられてござります』

『聞き度うない〜』と忠直は耳を掩ふやうにして云つた。

『去りとして申上げずには居られませぬ、其後片時も肌身を放さず、秀康様に添ひ奉る心を以て大切に所持致して居りました、この度御上意を蒙つて、御當所へ罷り下るに就き、萬一御改心の状態き時は、この御形身の一刀に依つて、御命を申し受くる旨上様へ御約束申上げてござります、それにわたくしから段々事を分け申上げるを御取用ひなきのみか、左中將様、秀康公の御位牌を持たせられて、様々に御諫言遊ばすを、耳にだにお止め遊ばさず、無法の御挨拶をなさせ給ふ、その御口上に依り御改心の御様子なき旨分明、然る上は上様へ御約束申上げた通り、この御刀で御命を申受けねばなりませぬ、生きて御恥辱をお受け遊ばすよりは一層潔く御命をお捨てあそばすがせめての御奉公であらうと存じます、いざこれにて』と云つて懐劍を差しつけた。

『いや自害はせぬ、可惜命を手づからは捨てぬ』

『お、御自害もなされませぬとな、既に御先代様の譲らせられた血汐は涸れ、悪魔の魂宿る上は

武士らしい御生害をあそばす事も適ひますまい、さらばわたくしが御命を申受けまする』

清涼院は震ふ聲で云つて懐劍の鞘を拂ひかけた、忠直は聲を鋭く

『上使と思ひ遠慮致せば、宜い事にして附上る、自ら捨てる事さへせぬ命を阿容々々人の手に渡さうか、理不盡に云ひ張らば、家來を呼び寄せ老體とて用捨せぬぞ』と威丈高に云ふ。

『まさしく天魔、まさしく悪魔ぢや、こりやもう——』と清涼院は力なく云ひ切つて倒れる様にドウとなる、とたんに新御殿でまた人の聲が盛り上がる。

『お部屋様、お部屋様、お待ちなされませ〜』と腰元端女が口々に呼ぶ中から、一國女の痴走つた聲が聞える、『御前は何れにぢや、殿様は何んとなされた、生死を諸共と御誓文申上げた言葉は反

古にはならぬ、わしをお傍へ連れてたもれ』それを聞くと忠直はまたそは〜と落着きのない色を見せた、光圀は鋭い眼をそ〜ぐ、忠直もしこの場を去らうとしたら據所なく手を加へて引戻さうと

覺悟した、忠直の不行跡はもはや矯正の見込みもない、武士は義の一字で生き、恥を恥とする意氣で生くる、しかも忠直は義よりも戀が重しと云ひ、取よりも命を大切とする、然る上ははや武士で

はないはや人でない、鶯は鶯の岡島と啼交はし、雉子は雉子の牝を戀する、武士ならぬものが武

士の心を知る筈ない、祖先の血の涸れた者が、祖先の義理を傳へる筈はない、此上は是非なく三河守殿を殺して當家の將來を立つる事に力める外あるまい、光圀は突嗟の場合に斯う思つた。

新御殿では人の聲が愈々亂れる、忠直は果して立上る、同時に鐵枯れた小牟久の聲が長局の廊下から傳はつた、

『お磯どのは御無事が、お磯どのは何れぢや、助けて下され、助けて下され』これに續いて中老や腰元が取押へやうとして騒ぎ立てる聲がすると、その聲を聞きつけたらしく一國女の痛高い聲が漸く近づく

『懷姫女は何れぢや、懷姫女の血が見たい、これへ引出してたもらぬか』宛然たる地獄の境界、光圀の血は燃えるが如く湧立つた、かう成行くも唯一人の一國女あるが爲

めぢや、一國女なくば三河守殿亂行もこゝまでには至るまい。光圀が一人心に斯う思ひついた時、忠直は夢の如く歩み出さうとした、清涼院は漸と我に返つて

『三河守殿、上意でござるぞ』と高く呼んだ。

清涼院は忠直の動作に一縷の望みだに無きを見て

「今は是非ない、あなたは御自分で御自分の御入りなさる穴を穿つてゐらせられちや」今にも悲しみに消えて行くやうな聲で云つたが、やがて容を改めて懐から奉書を取出した、まさかの時はそれに依つて最後の處分を下すべく懐中深く秘めてゐたのであつた、聲を張上げて

「上意」と呼んだ、流石の忠直も平伏する、光圀も謹んで首を下げる

清涼院は震ふ手に奉書を開いて、文書を読み上げる。

「越前麻井の城主松平三河守忠直、其方年來不調法の所爲有之、これに依つて豊後國へ遠流申付候者也」

讀終つて兩額に玉のやうな涙を流した、秀康の功名も光圀の苦心も將一家中全體の忠節も盡く水の泡になつて此一枚の奉書に總ての運命は解決された、公儀御沙汰一度下るうへはもはや如何ともするに術ない、忠直豊後國へ遠流と定つては當家忽ち斷絶、六十八萬石の知行は沒收、一家離散の悲しみを見るべきは無識である。

「上意謹んで御受け申す」忠直は興衰した聲で云つた、清涼院は堪りかねたやうに上座から滑り落

ちて忠直の膝に縋りついた。

「今迄は上使、上様御名代なれど既に御上意を傳へる上は、あなたを生んだ清涼院ぢや、近頃は御出府もなく、久しう御意を得かねて居た、此度の始末、今と爲つては何んと申さう様もない、罪科定まりましたまふ上はすぐ豊後へ御出發ござりませう、豊後國は筑紫の果と承はる、生きて再び御眼にかゝる時はあるまい、よくよく御顔をお見せたまりませう」

おろ／＼とした眼で見上げる、骨肉の情が雙方の胸に湧いて、忠直は見下す、其眼元を穴の開く程に見て

「御父子とて争はれぬ、よくも御先代様に似させられた、其御眼元を見るにつけ、有りし昨日が忍ばれまする、御先代様は何者よりも義の一字を重く見させられ、何事よりも恥を見るを第一の恐れと爲給ふたに、あなた様の御行蹟は何事でもござります、御容貌、御姿、恰度瓜を二つに割つた如くよく似させられて、肝心の御心の少しも似させられぬは、何と云ふ悲しい事でもござりませう、秀康公御他界の砌には只管御子孫の御繁盛を祈らせられた、その御聲はまだ耳底に残つて居ります、孝顯寺の御墓所は土まだ乾き申さぬに、御家の礎は早や動いて男らしい御生害でも遊ばす事か、

情なく遠流の客となりたまふ、秀康公御霊、草葉の蔭から見させられ、如何ばかり本意なく御思召すであらう斯様な事に立到るは抑誰の罪であらうぞ、悪魔に等しい女の爲めか、奸佞邪智の御側役の爲めか、そもく又権現様を恨みたまふ御心に萌すところか、何れにしても残念至極でござります、されど云うて返らぬ事、豊後國は筑紫の果、風も荒く人の氣も無作法と承はる、今までは東照宮様御孫、越前七十萬石の御主、世の尊敬の厚く、何一つ御不自由もあらせられず御在したでござりませうが、これからは天下の罪人、役人衆に慈悲はござりませぬ、御痛癢をお起しなされてはなりませぬ、人の憎しみを御受けなされてもなりませぬ、御風邪召しても御典醫參る筈もなければ、一服の良薬を差上げる者もござるまい、朝夕に御心を御付けなされませ、御自身で御自身の御身をお守り遊ばしませ思ひがけもなく悲しいお別れでござりました」

清涼院の言葉に親身の情が露と置かれる、今迄は不法と無理とを楯にして心強く云つてみた忠直の迷ひの雲が取退けられると、そこに誠の情が出る、家に對する心、前非を悔ゆる心、親身に對する切情、悔恨と懺悔とが胸の底に結ばれて氣も狂はしくなつて來た。

「お救したされ、我等思ひ違ひを致して居つた」と夢の覺めた如くに云ふ。

(十三)

「遅うござりますすく、その御口上今一刻早くば、御奉書は其儘懐の中に收めて、江戸へ歸る覺悟でござりました、而も一度封を切る上は御説汗の如く再び歸るところござりませぬ、しかしこれも皆天命、御運の末と思ひます、百千の罪も一心の懺悔によつて、立どころに消えると云ふ、只今の御一言、あなたをよい所へ導き下さるでござりませう、さ、御用意なされませ、さ、わたくしの供をして江戸から伴ひ参つた者は、すぐあなた様の警固でござります」

忠直は改めて光圀の方を向いて

「さて左中将殿、先刻よりの御意見、今になつて沁々骨身に滲み申す、斯く成り行くも東照宮を怨み奉つた神罰と心得申す今更誰を恨むやうもござらぬ、我身は流人、一家は斷絶、ただ不幸に憐れなはこの軀ぢや、よきに御世話つかはされ」と云ふ、光圀は始めてそこに親身の姿、祖父家康の血族の蔭をみとめ得て、満足さうに笑を含み

「天命とはよい御覺悟ぢや、前非御悔悟に定まらば、如何に重き罪科を抱かせ給ふとも御赦免の御

沙汰參るでござらう、我身當所へ参り、當城の危急を救ひ参らせやうとして力及ばず、斯様の破目に立至る上は、せめて後日御相續の上について、一臂の方が添へたく存ぞる、幸ひ御舍弟伊豫守殿越後高田の御城に御在します、伊豫守殿にも御先代の御血は續き、清涼院殿の御腹に生れたまひ、貴殿豊後へ御立ちの後、光圀一命に懸け、御家名相違なく立行くやう取計らひ申すでござり申さう人の世は考少不定、今日在つて翌日なき定めと申せば、三河守殿只今御他界、御舍弟准養子に御坐りなされたとすれば、御孝道の道立ち申す、そこを御懸念なく静々お下りなさせられ」と強く心を籠めて云つた。

「よく仰せ下された、伊豫守忠昌は親身の弟、彼に跡目相續仰せつけられなば、よし七十萬石が半に減しても、家名斷絶致されば、父の御靈に對し、且つは東照宮御神靈に對し、我等も申譯立ち申す、唯貴殿を頼み奉る」

忠直は惜々云つた。

「罪科既に定まる上は一刻も早く遠流の地へお下りなされずばなりません、御跡目の義は左中將様、御刀にかけ、御引受け下さると仰せ遊ばす、すれば大丈夫、御心配は入りませぬ、それをせめて

ての御喜びになされて、早々御支度あらせられませ、わたくしは只今より御家老衆へ此義申渡すでござりませう」と清涼院は云ふ。

忠直は重き罪名を頭に着て力なく立上る、次に控へた小姓と茶坊主とは案内して御居間へ行く、清涼院は涙を拂つて光圀に一禮、家老重役と共に善後の策を講ずべく座を立つた、光圀は扇を膝に當家再興の事に就いて、頻りに思慮を費す折柄

「殿様は何れぢや、御前はどれにお在します、豊後國はさて置き虎伏す山へも諸共に参ります」と云ふ聲が近くなる。

「お待ちなされ、お待ちなされ、御上使の御座所近くお越しなされてはなりません、腰元端女が口口に引止める、それはまさしく一國女と知れた、手弱い、細い白琅玕見るが如き手に七十萬石の城を覆した、悪魔に等しい一國女が忠直の所在を求めて踏跟と此處まで來たのであつた。

光圀の心は忽ち燃える。

「お磯はどれにぢや懷妊女は何れにある、わしはあの女の血が見たい、あの腹の赤兒を引出して、松ヶ枝に懸けて見たい、御前に此事をお願ひ申さねばならぬ」

「其所へは偽りませぬ、此處は御上使の御居間でござります」  
 女共が左右から引止めるを振切り拂退けてつか／＼と奥座敷へ行つた、開放した縁から涼風が戰入つて、軒の簾に青葉の縁が波を打つ、その下に光圀は泰然と坐つてゐる。一國女は思ひがげぬ人が唯一人坐つて居るのを見て思はずも後へ下り  
 「誰方ぢや／＼」と立つた儘で問ふ、光圀は無言。  
 「殿様は在らせられぬ、御前はどこへ御出でなされた、御目に懸つて御無心を申さではならぬ、今其處にごさる御方いな、三河守様を御存知ないか、今迄これにお聲がしてゐた様であつた、何方へ御隠れ遊ばした、御存じはないか」  
 流石に傍近くへは寄りかねて遠くから斯う呼んだ、光圀はまだ無言、扇を笏に眼を閉ぢた儘じつと坐る。  
 「お下りなされませ、一國女様、斯様な所へ御出でなされては偽りませぬ、お退りなされませ」腰元共が左右から袖を取るを振拂つてつか／＼と二の間へ進んだ。

(七四)

「御前、御前」と一國女は悲哀の調を帯んで呼ぶ、腰元端女は次の間から指差恐れて「あれよ、あれよ」と云ふばかりである。  
 光圀は眉毛一つ動かさなかつた。  
 「殿様ののう、殿様ののう」と一國女は踰跟と呼びながら光圀の前を通つて、縁端へ出やうとする光圀は始めてくわツと眼を開いた。  
 「無禮者、下れ」と叫んだ、一國女はけろとして  
 「お、御前様、そこに御出でなされた、少しも知りませぬ、御前は何れにお越しあそばします」斯う云つて媚ある眼に光圀を見た、天の成せる美しさは何に譬へん様もない夕日に碎ける波の色、月の前に装ふ夕櫻、それ等も一國女の美しさに雙べては物の數でもなかつた、もし光圀が一通りの大名であつたら忽ちその美に打たれて魂も熔けたであらうが、光圀の鷹は鐵であり石であつた、ハタと睨みつけて  
 「己れ悪魔」と云ひさま立ち上つて縁から庭へ蹴落した、咲き盛つた牡丹に夕嵐が強く吹く、露は亂れ花瓣は碎けて泥の中へ狼籍する、一國女は横様に倒れて暫くは起きもしかねた、縁の黒髪は散



ばらに亂れ、挿してゐた櫛笄は四方に散り、小桂の袖は裂けて白綸子の縁を取った四田鹿子の一重絹の裳が翻る。

『あれい、どなたぞお越し下さりませ、誰方ぞ……誰方ぞ……』と呼びたてる、次の間から此様を見た腰元端女は後難の身に及ばん事を恐れて一目散に逃げ去る、光圀は一國女が踏石で臍腹を打つて苦しげに呻き悶えるのを見てゐたが

『誰かある、魔性の者を引立てえ』と云ふ、すると其沙汰を待ちかねてゐたやうに助三郎と格之進とが幾間かを隔てた長廊下から飛んで出て跣足の儘かけ下りると、一國女の左右から白琅玕のやうな手を燃上げる。

『それを見い、誠に傾城傾國の装とはこの女の姿ぢや、その手に三河守殿の御運命を乗せて思ひの儘に弄んだ、越前七十萬石の礎、その爲めに動き、家中の者、城下の者、限りなき命をその女の爲めに捨てた、憎みても餘りある奴、不淨門から追放て』

『心得てござります』と二人は異口同音に云つて

『魔性の者立ちませえ』と云ふ、一國女は血走る眼に屹と見上げて

『御前達、わしを何となされます』

『何んともせぬ、左中將様の仰せに隨ひ不淨門から追放するのぢや』

『さうはなりませぬ、左中將様であらうが、誰方であらうが、御前方の心の儘にはなりませぬ、わしは三河守様の中前ぢや、三河守様の御説とあれば火の底も素る、なれど他人の仰せつけ、こゝ一寸も動きませぬ』

『すれば何うする？』

『さうなれば尙の事、このお城は退きませぬ、わたし一人は退きませぬ、例へ何處の果までも殿様のお供して参ります』

云つて立上らうとするを、助三郎は強く押へる、格之進は取つた腕を引戻す、この時忠直は以前に變る姿、粗末な衣類に茶紺袖の十徳様の物を着て、長廊下の端を渡る、さうして見るともなく見ると、其處に一國女の眞青な顔をして見知らぬ武士に兩の腕を押へられてゐる、今の先まで褥を並べて歡樂の盃を上げてゐたのが、今は離れ離れになつて各々暗い世界へ旅立たうとしてゐる、流石に心の強い忠直も暗澹たる前途を思ひやつて、蕭然と聲を呑む、一國女はそれと見ると

「お、殿様」と一言、急ぎ足に駆け寄り、寄らうとしたが自由はない。「控へ」と大喘せられて、倒れるやうにばつたりとなる、忠直の後に付いてゐたは水谷又兵衛唯一人であつた。

「お急ぎなされませ、清涼院様お待ちかねでござります」

忠直はもう一言云ひたい事も云ひも得せず、一國女を見詰めたがら行過ぎた。

(七五)

吉田修理は光圀の前へ出て平蜘蛛の如く平伏した。

「左中將様へ厚く御禮申上げます、御蔭を以て御當家に禍した悪魔退治、これも皆左中將様御蔭と

家中一同に代表り御禮申上げ奉ります」さう云ふ顔で光圀は凝と見たが、やがて聲を曇らせて

「秀康公以来何なき御家、御家中の總人數六萬餘人在はすと聞くに、誰一人身を以て御諫言申上げ

る御家來衆もなかつたは、扱々残念至極でござる、お城の石垣は如何に固くとも、天主の梁は如何

に大きくても忠義の家來大黒柱となつて支へるのでなくては、お家の維持むづかしいのを今悟り申

した、三河守様御不才か、抑又御家來衆の不幸か我等唯秀康公御靈を御いとしく心得申す」

吉田修理は面目なげに差俯向く、光圀は言葉を改めて

「今日は三河守殿配所へ御發足と心得申す、御供には何人が御立ちやな」

「されば聞かせられ、清涼院殿御意とあつて、家中の者一人もお供の儀叶ひませぬ、唯大門與兵衛

年來の御恩に報いたき旨強ひて乞ひ申す爲め彼一人お召連れ、あとは清涼院様お供として下向した

江戸在府の者警護の任に當るだけにござり申す」

「左様か、六萬人の御家中誰一人身を捨て、御供に立つ者なき、先頃三河守殿御不行跡を見限り、

浪人した與兵衛のみ豊後國まで御供申上げるといふか、それにて忠義の御家來多いのに驚かれる、

先代様御他界の砌には、永見某を始め二十四人枕を並べて冥土の御供を致したと承はるに、御當代

三河守殿遠流の身とならせらるゝに臨み、一人も身を捨て、御供を願出づる者なきに因つて、御家

滅亡の時機のがれ難き儀を推量申す、三河守殿よし一國女の色香に迷ひたまふ所なくとも、斯様に

忠義厚い御家來ばかりをお持ちなされては、永く當國を治めたまふ譯にも行くまい、唯々御運の末

を悼み参らする。」

光圀は悵然として云つた、修理は重い調子で

「承はる處、左中將様御一命にかへさせられ、御當家御跡目、御舍弟様へ仰せつけあるやう、御骨折下さるげな、何とも忝けなき儀、例へ御知行は五十萬石三十萬石に減申しても御家名斷絶の悲しみなくば、一家中の者申すに及ばず、秀康様御靈さぞ御満悦であらうと存じ奉る、此上ながらよきに御骨折遣はされませ」

光圀は苦々しい顔をして聞いてゐたが

「さうぢや當節は主人よりも己れの身が大切にござるとのう」と強く釘を刺すやうに云ふ、修理は狼狽て

「いやさう云ふ理ではござりませぬ、只念の爲御願ひ申した分でござります」修理は惨々の體で詰所に歸つた。

光圀の力に依つて一國女放逐、清涼院の齎せた奉書の趣意によつて、忠直遠流、家名永く斷絶の旨、一家中に傳はると、流石に黒き雲、城の内外を閉して陰鬱の氣到る所に涙ふ。

「三河守様は今日すぐに豊後國へ御發足あらせらるゝやうぢや、餘所ながらでも御暇乞申したいがこれもなかはぬか、斯様に爲りゆくが恐ろしいとて、忠義を思ふ方々がこれまで再三御諫言を參ら

せたが、その甲斐もなく越前一國の潰れとなつた、三河守様大阪御陣に一番槍の功名さへなされずは、斯うした事にもなるまいを、あの時の御勝利は遂に今日の滅亡を招く因となつた、何とも残念な事ではないか」

寄ると障ると斯うした事を語り合ふ、その中で第一皆の思案に上つたは、人間庫を何うなさるつもりであらうかと云ふのであつた、彼の中には罪なくして繩目にかゝつた不運不幸の人間が残つてゐる、忠直の不幸は彼等に無上の幸福を與へて、此處に助命の喜びを見る事が出来るかそれとも、此儘闇の中へ葬られて了ふのか。

續いては一國女が何のやうに身の終局をつけるであらう、それにつながらる小山田多門がどう云ふ處分を受けるであらうか、光圀の云ふが如く、御舍弟伊豫守忠昌殿に跡目相續の義が叶ふであらうか、これらの諸問題が皆の前へ横はる。

「残念ぢや、懷妊女の血を見ずに此所を去るが残念ぢや」一國女が惡魔の如く叫ぶ聲は若葉の庭を過ぎ、花畑の間を過ぎ、藪を過ぎ、裁籠を過ぎして漸々不淨門に近づく

「何とお聞きなされたか、一國女の運も傾き、三河守様の御運も定まり、お家は斷絶、殿様は豊後へ流罪、江戸からの御上使は三河守様の御腹、清涼院様と承はる、あのお方は女の鑑と呼ばれた賢婦人、奥方運乗院様は烏丸大納言廣光卿へ御再縁をなされたが、清涼院様は操正しく御先代様の御菩提をお弔ひなされて、女ながらお家の大黒柱と云はれたまふ、此度の御上使も御自分からお願ひなされ、遠路を御下向遊ばしたげな、而もそのお力に及ばず、斯様な破目に立至つたは残念ぢやござらぬか」

「さうとも、それにまた水戸様の若殿左中將様といふがお越しになつてゐたさうぢや、このま

たお方がお年こそお若けれど、古今の賢者、折角當所へ参りながら家中の人を助けかねたかはりに御家の御運命を助けるとお云ひなされ、跡目御相續の義に就き強う御骨をお折りなされるといふわ

さ」

「それにしても惜いのは一國女、彼女の爲めに御家中は申すに及ばず、御城下の町人、男も女も、若いも年寄つたも、どれ程難儀をしたか分らぬ」

「さうぢやとも、此度の大變も結局一國女のなす業、一寸試し五分試しにしても飽き足らぬ奴

でござる、既に今日は蕎麥屋の内儀を始め二十七人の命を絶つたといふぢやござりませぬか」

「その人達の怨みだけでも、安穩には過されまい、よもや殿様の御供をして豊後の國とやらへ参るやうな事はござるまいな」

「何とも知れぬのう、なにが七十萬石の御知行よりも一國女一人が大切なとまで思ひつめてお在で

といふ、それぢやもの、生き別れをなさる筈もあるまいて」

「いや、其様事があらうか、清涼院様、水戸左中將様御控へぢや、御家中のお供さへ御救しが

ないといふに、悪魔とも毒蛇とも例へやうのない悪人を何としてお供にお付けなされうぞ」

「それでは何うなるであらうかの」

「どうせ水戸様の御手に罹つて一命を失ふたか、または今迄己れが人々に憂目を見せた通り、人間

庫へ打込まれたか、よも安穩にはあるまいわの」

「己れこゝへ出て参つたら我々の皆の仇を打つてくれやうもの、残念ぢや、残念ぢや」

城の御濠外に簇り集つた多くの町人は、忠直の成を悼み、一國女の悪行を憎んで、様々に嘲し

合ふ、そこへ内から元氣のない顔をした武士が三々伍々引取る、かと思ふと國中の要所々に城

を構へて、守護の任に當つてゐる城持家老が早馬で驅けつける、七十萬石の御家、一朝にして滅亡の悲運に向ふのであるから、城の内外は眼も當てられず慘澹たる様であつた、城下の町人、近在の百姓、お家滅亡、忠直遠流の噂を聞いて、我も我もと驅け集る、折から不淨門がさつと開いて、網のかゝつた忠直の乗物が昇ぎ出される、籠傍についたのは大門與兵衛只一人、其外は江戸から上つた清涼院の供廻りが前後左右を警護する、昨日にかはる姿、籠の窓の隙間から忠直の物淋しい姿が見える、城内ではわつと泣く女の聲

『おさらばでござります』と別れを告げる近習の聲が、濠端の松風に和して、物淋しく悲しげに響き渡る』

『殿様ぢや殿様ぢや、殿様の御發足ぢや』見物に來た町人百姓は口々に云ひ喋しながら見送る、警護の武士はその間を分けて通る、一しきりすると

『殿様、殿様』と狂氣のやうに呼ぶ一國女の聲がする、續いて『何處までも御一所に参ります、お連れあそばせ』と泣き喚く、それを助三郎と格之進とが、左右から腕を取つて不淨門まで出で來り、汚ない物を捨てるやうに門外へ突出す、一國女は踏跟と倒れやうとして危く立止まる。

『それ一國女ぢや、それ一國女ぢや』群衆は雪崩を打つてその前へ驅け集まる、機會に不淨門の戸は閉まる、一國女は石垣の角に身を靠せて、言葉もなく佇む、後の門は閉ざされて、歸るに所なく、前には群衆が押寄せて、口々に

(七七)

『惡魔、毒蛇、化性の者』と罵り騒ぐ、石垣の石に頭を砕くか、外濠へ身を投げるか、乃至は舌を嚼切るか、群衆の中へ身を投出して、その怨みの刃を受けるか、何れにしてもそこが命の捨處と思はれた。

蒼ざめた顔、大理石のやうになつた白い頬の上へ、ばら／＼と亂れかゝる鬢の先に、悲惨な最後の色が見えて、唇の色が一息毎に褪て行く、その唇を洩れて

『殿様ののう、殿様ののう』と震え聲で呼ぶ、その聲は高く松風に入り、低く群衆の間を縫うて忠直の乗物を追うて行く、忠直の乗物はいつの間にか見えなくなった。『彼奴のお蔭でわしの母様は人間庫へ入れられて、其の上無残に首を切られたわの』

『わしの娘は懷妊中を召取られて玩殺しに遇ふた』

「わしの伯父御も殺された」  
 「わしの弟も、玩殺して遇ふた、その怨み忘れぬ」  
 群集の誰彼は斯う叫んで恨みの眼を一國女の上に注ぐ、一國女は美しい眼を赤ら闢ませて、一心にそれらの人々を睨んでゐる、彼女の總身の血は冷え渡る、赤い血を見ねば満足せぬ彼女の心が、躍る如くに高ぶる。

「殿様は海山五百里を過ぎて、九州の果へお越しなされた、その落着きたまふ所は海か山か、はた里か知らぬが、わしの行く世界は目の前に展開いた、わしの笑顔を見る爲めに、お殺しなされた人の怨みが、一國となつて押寄せる、もう選れるに道はない、今返は人の血を見て樂んだが、今は我身の血を見て笑ふ最期の時節が来た」彼女は心に斯う思ふ、この時、不浄門が再び開いて、人間庫へ押籠められてゐた人々が、次々に救され出る、其中にはお磯も在った、永見右衛門の忘れ形見お君を抱いた乳母も在った、思はぬ命を拾ふた喜びに宙を飛んで驅去るもあり、又群集に投じて一國女に恨みを返さうとする者もあつた、取分乳母のお孝は主を打たれ兄を殺され、その身が堪へやらぬ憂目を見た怨み、骨身に沁みてゐるので、一國女の姿を一眼見ると釘付になつた如く立止つた、

「一國女か、オ、己れ一國女か」怨みの籠つた聲で斯う云ふ時  
 「兄の仇ぢや、覚え居れ」刃を閃めかして打かゝつた年若な町人があつた、手には二尺餘りの白刃が閃めく、それを眞先にして、數十人の武士町人が、刃を閃めかすもあり、棍棒を振上げるもあり、潮の如く押寄せて、一國女を間に取圍んだ、お孝は聲を張上げて

「お待ちなされ、皆様も御怨みがござりませう、しかしこの姫君に雙べては物の數でもござりませぬ、皆の衆はこの姫君を誰方と思召す、先日お家の滅びた永見右衛門様の忘形見の姫君様でござります、お祖母様、御兩親様、忠義の御家來御一門、残らず命をお捨てなされた、そのお怨みをお報い遊ばさねばなりません、一の太刀をこのお方にお譲下さりますせ」

云ふと皆が同情の眼をお君に注いで  
 「永見様の姫君か、今一刻の事で一國女の刃にお罹りなさる所、まだ御運強うあらせられた、御兩親様への御供養御一門への御手向け、一の太刀をなされませ、したがこゝは御門外、恐れ多うござります。よい場所へ連れて参りませう」骨太の武士は斯う云つて一國女の襟髪に手をかけた、一國女は恐ろしい眼をして睨む、それを闢はず、ざる／＼と引摺り行く、その徐について大勢の人達は

白刀を引下げ、棍棒を携へ着いて来る、お孝は懐剣を引抜いて、それをお君の手に持たせ  
「さ、一の太刀をなされませ、」斯う云つて肩先を丁と切る、鮮血さつと迸走つて西田鹿の子に躍み  
出る、それを見ると

「悪魔の血ぢや、毒蛇の血ぢや皆が笑へ、笑へ」

一同に聲を立て、笑ふ、その物凄さ恐ろしさ、御漆の水に波逆巻いて、天地忽ち覆るかと思は  
れた。

「己れ、己れ、親の仇、叔父の仇、妻の仇、娘の仇」

多くの人が云つては切り、また恨んでは切る、花の如に美しかつた頬も、眉も、首も手距も太刀  
の跡を止めぬはなく、寸段々々に切阿責まれた、そうして空しく息の絶えた時、夕闇深く魔ひ来て、  
氷のやうに冷たうなつた屍の上を夕月が空しく照らす。

(七八)

「わしにも一太刀恨ませて下さりませ」

人々が一國女の屍を蹴りつ蹴りつ思ひの儘に恨みを晴らして立去つた跡へ轉ぶやうに驅けつけた

は波々伯部清左衛門の家來であつた、脊には清左衛門の忘れ形見お辨を負うてゐた、月明りに一國  
女の淺ましく切阿責まれてゐるのを見ると、はら／＼と涙を流し

「己れの爲に御主人様は非業な御最期をお送げなされた、御主人様ばかりでない、永見様御一家、  
神谷権平次殿義に依つてお命をお捨てなされ、一家中の者多くの寄せ手に取圍まれて、さん／＼に  
戦ひ、太刀折れ、矢種盡きて、勇ましき最期を遂げた時、己れは天主臺の上から面白さうに見てお  
たな、その罪科が今報うて斯うした惨な姿となる皆天罰ぢや、この恨みを受けへ」と云ひながらお  
辨を下して一刀を手に持たせた、一國女の身體から出た赤い血は紫色になつて月の前に凍る、そ  
の屍を散々に切りつけ、高く大空を仰いで

「オ、よい月ぢや、美しい月ぢや、あの姿が永見様の御靈か、その左右前後に照り輝く星が御家來  
衆の姿か、永見様御一門衆、旦那様、権平次様、其他無惨の刃に斃れて一命をお捨てなされたお方  
方の御靈魂、もし此世に残り在しませば、今こゝに横はる一國女の淺ましい姿を御覽遊ばせ、この  
女の爲に様々な憂目を御覽なされたでござりませう、その御怨みをお晴しなされませ、昨日は人の  
身、今日は我身、人の胸を劈いた刃は、やがて我身に落ちかゝつて來たのでござります、笑うてお

「珍らしやお辨さま、あなたも御無事でお出でなされましたか」  
 「オ、お乳母どの、姫君にも御懐しい事でござります、かうして御無事なお顔を見、御一門の仇敵を打取つた喜びはござりまするが、御家滅亡、三河守様は遠流、このお城もはや殿様のお城ではござりませぬ、それを思ふとこんな残念な事ないぢやござりませぬか」  
 雙方が手を取遺つて泣き沈む、また東西の辨もないお辨お君が同じ様に涙を流す、その可憐な姿を見るにつけ四邊に居残つた者は皆な泣いた。  
 斯うした悲劇が御濱外で演ぜられてゐる時、城内では小山田多門を始め月岡養以、林求馬、眞砂大學、莊野市右衛門等一味の者、悉く切腹仰せつけられた、それは皆清涼院の計であつた。  
 一國女の屍は中藤楓の手によつて、然るべく葬られた、彼の心こそ罪はあつたが、その屍に罪はない、思ひの儘に恨みを返した土地の人は、その後世を弔ふについて應分の力を添へた、福井市にある彼女の墓は此等同情ある人の建立に由るのであつた、それに依つて一國女も永く成佛の喜びを見たであらう。

この事、國內へ知れ渡ると城持の家老が皆登城する、第一には府中の城主本田伊豆守富正三萬九千石、次ぎには丸岡の城主今村大炊助盛次二萬五千五百石、次ぎには大野の城主土屋左馬助昌春三萬八千石、次ぎには柿原の領主多賀谷左近三經三萬二千石、次には谷口の領主山川謙岐守朝定一萬七千石、次ぎには敦賀の領主清水丹後守一萬二千石、次ぎには勝山の領主林長門守九千九百三十石、次ぎには木の本の領主加藤四郎兵衛康寛五千石、それに南江守の領主吉田修理寛博を加へて福井の九家老と呼んでゐる、その九家老が一堂に集つて、お家の前後に就いて策を廻らす、忠直の心は一國女及び多門の爲めに亂れ、誠前一國黒雲に鎖されてゐたのを知りながら、身を捨て諫言するにもあらず、見て見ぬ振りをしてゐたには様々の事情もあらう、武士の意地も混つてゐやうが、それにしても公儀へ對して申譯立ち難き仕方であつた、彼等家老重役の心には將軍家に次ぐ家統、東照權現の御孫、よし少々の不行跡は有つても御家の滅亡を見る如き事はあるまじと高を括つてゐた、その安心がやがて滅亡の原になつたのである、清涼院や光岡から「忠直はよい御家來を澤山に持たれてお幸福でござる」など鋭い釘をさされたのも、家老重役の油斷から事起る、今更命を捨てても及びはない、忠直遠流となり、一國女又の銷と消え、悪人誅に伏し、無實の罪人、家々に歸つ



たあとには唯一家中離散の悲しみが残るばかりであつて、家老を始め六萬餘人の家中天を仰いで歎息した。

(七九)

「水戸左中将様の御計らひで、御家の再興成るさうぢや、越後高田へ御分家になつてゐる伊豫守忠昌公が、當城へ御入城と承はる、誠に目出度い」暫くすると斯う云ふ噂が頻りに起つた、忠直の世に救ひの手を出す事がなりかねたかはりに、名譽ある越前家を再興せずしては秀康の靈に對し申譯なく思ふので、一國女慘死、多門切腹の翌日、光圀は福井を發て江戸へ歸つた、尤も早馬、一寸の猶豫もくれず、小石川の家敷へ着くと、父頼房へ一仕始終を言上、直に將軍家へ對面を願ひ出で、越前家再興の事を乞ひ申した、その親切、その同情はやがて將軍家を動かして、望みの如く伊豫守忠昌へ越前家の家督を仰せつけられた、忠昌は前にも記した如く、秀康と清涼院との間に生れた忠直の直弟で慶長二年二月十四日、大阪の生玉で産の紐を解く、始め上總國姉崎で一萬石に封ぜられ幾程もなく上州下妻三萬石、信州松代十二萬石、やがて參議に任ぜられ、正四位に叙せられて、越後高田二十萬石の主となつてゐた、それが光圀の盡力で起前の國へ所換へ仰せつけられ五十二萬石

を下された、忠直は不平の爲めに身を失つたが秀康の血統は絶えず、その舍弟福井の城の跡を繼ぐ、これで光圀の本意も立つた。

所が忠直の嫡男に光長といふのがあつた、これは二代將軍秀忠の娘、高田御前と忠直との間に生れた嫡々で幼名を仙千代といふ、全體なら福井七十萬石の跡目を相續すべきであるが、父忠直豊後國へ流され、一家斷絶、福井の城は改めて叔父の忠昌に賜はつたので、あはれ光長は一生を日陰者で送らなければならぬ羽目となつた、けれど血統から云ふと家康の曾孫、秀忠の孫、三代將軍家光には叔父甥に當るので、そこに深い同情と憐愍とが湧いた、忠昌が福井城へ封ぜられると共に、將軍家はその母高田御前に對し、越後高田二十五萬石を化粧料に下さるの旨を沙汰せられた、よつてそれを光長に譲つた、光長はやがて高田の城主となり、從三位中將に任ぜられ、越後守となつた、即ち忠昌と光長とが、この土地を入替はつたのであつた、唯忠昌は二十萬石が五十二萬石になり、光長は六十八萬千七百八十六石が二十五萬石に減じただけの相違であつた、主君と共に家來も入變つたが、光長は二十五萬石の知行、六萬人の家來を養ふ事は出来ぬので、半分以上は福井に止まり、そして改めて、伊豫守へ召出された。

この越後守光長は天和元年、家中の武士動亂を醸した事によつて位をのぞかれ、伊豫松山に移されて、米一萬俵を賜はつたが、その子從四位少將越後守宣富は新たに召出されて、元禄十一年作州津山十萬石を下された、即ち先に光圀に依つて家風を矯正された森美作守は遂に亂心して一家斷絶となり、其跡を越後守宣富が受けたのである、是もまた不思議の縁と云はねばならぬ、そこで記して置かねばならぬのは忠直の事である、豊後へ左遷されて後は名を一伯と改めて、配所の月をながめてゐた、將軍家から付けられた知行は僅か五千石である、當時豊後府内(今の太宰府)荷揚の城三萬五千石を領してゐたのは大関秀吉の軍師としてその名の高かつた竹中半兵衛の孫伊豆守重隆の長子采女正重興であつた、重興はその頃九州第一の智者であつたので、將軍家からは特に見込んで忠直の監視を命じた、忠直は家康の孫であり、大阪陣第一の功臣として將軍家の命令をも、反古にしようとした豪の者であるから、容易の事では制伏する事が出来なかつた、采女正重興の智謀を以てしたら或は首尾よく制御するかも知れぬと云ふので、特に豊後國へ遠流されたのであつた、重興は將軍家の命を拜すると共に途中まで出迎へ、そして忠直に對面すると言葉巧みに

『此度御前當所へ御成りの儀につき公方様から内々仰せ越された儀がござります、それは餘の儀に

でもなく、此度罪を得させられて一端遠流にはなされたれど、お家柄と云ひお血統と云ひ、此の儘捨て置きたまふ思召しではござらぬ、即ち行々は豊後國萩原二十五萬石を參らせて、九州の探題になさるべき御手筈と申す事、すれば當座の御辛抱、御窮屈ではござらうが神妙に御沙汰をお侍ちなされませ』と云つた。

(八〇)

忠直は心にさもあらうと思ふので

『萬事よきに取計らふやう』と満足氣に答へた、そこで重興は易々忠直を柿原へ伴つてそこに然るべき館を造り、周圍に手勢數百騎を配つて厳しく監視の任に當らせた、將軍家ではその仕方を神妙として重興の江戸參觀を赦し、別に目附二人を遣はして絶えず忠直の舉動に注目させた、目附屋敷の跡は今も猶附近の長池村に残つてゐる。

重興は忠直を囚屋同様の館に押込めては置くものゝ、昨日まで榮耀榮華に暮してゐた境界に思ひ比べ、今の淺ましい姿を悲んで府内の町家からお蘭といふ美女を捜し求め傍女として差上げた、忠直はそれによつて深く慰められた、その他にお鶴といふ側室を置いたは後の事である。

萩原は舟着きぢや、萬一の間違ひがあつてはならぬ、最う少し不便な處へ移すがよからう、江戸から斯うした知らせが来たは、その後數年を経た時であつた、重興は命に従つて忠直の館を津守に移した、すると間もなく重興は長崎奉行として彼の地へ赴く事になつた、一家中の者皆喜んだが、その中で桑彦左衛門といふ老巧の武士のみは涙を流して悲しんだ。

「我君の御勳は大阪御陣より引續き天草の動亂、一伯公流罪の始末、すべてに抜群の御奉行をなされたにも拘らず、御加増の御沙汰はなくて、長崎奉行の御役目を仰せつけられたまふ、御當家の滅亡も早や迫る、これ乍然一伯公を欺いて萩原の邊土へ御移しなされた天罪が報つたのである」と云つたが、果せるかな、家臣片島五郎右衛門を府内に残して、留守居を命じ置き、長崎へ赴任した重興は榮華身に餘り才智反つて身を災して酒と色とに身を誤まり、程もなく切腹仰せつけられ、長男源三郎と共に刃に伏した、弟筑後守もまた流罪になつた。

忠直は寄る年と共に我も折れ氣も減じて愛妾お蘭との中に生れた一子春姫の生成を待つてゐたが、お蘭の方は産後の肥立あしく遂に亡き人の數に入つた、忠直は掌の花を失つたやうに悲しんで、憂き年月を送つたが、遂に慶安三年寅の三月十日逝去した、時に年五十六、竹中采女正の後を

受けて府内の城主となつた日根野織部正から直に其の事を目附役へ通ずる、目附役から江戸將軍へ申上げる、將軍家からは遣使として代官川村七兵衛、眞田長兵衛、出張し、その頃はまだ越後田の城に居た嫡子松平伊豫守光長から差遣はした家臣堀三郎兵衛、佐野五郎太夫、山岡伊織等の手に依り十月十日遣言によつて駄の原淨土寺に葬る、法號を西嚴院相譽連友大居士と云ふ、すると同四年光長の願ひによつて忠直の遺子引取の爲め、將軍家より上使として眞田長兵衛、越後守より堀三郎兵衛、遠山次郎太夫等九人それに典醫四人、賄ひ方、足輕二十人、徒士十一人、中間十五人、飛脚三人、出張の上、松千代、駒千代、お輕の三子と忠直の寵愛した腰元三人を受取つて音津川から舟に乗つた、日根野家の家來二百十四人警護の役に當つたとの事である。

忠直につけられた五千石の知行所は用人川村七兵衛から代官小川遠右衛門、同じく又右衛門に引渡し、館は上野六坊の蓮壽寺へ寄附せらる、館跡は再び耕地として土地の百姓に下されたが、お居間の後は畏れ多いと云ふので畠地にもせず、五輪の塔委を立て、其の跡を弔つたといふ事である。

墓は今も大分市の淨土寺に有るが明治九年九月美作津山藩の家臣某、その舊主の命に依つて遺骨を納め東京へ歸つて、白山の淨土寺へ改葬したとの事である、大分の淨土寺は鎮西派に屬する互刺

で永正元年白蓮社満譽覺了和尚の創設に掛る、元は豊後海部郡西の京に在つたのを文祿三年傘輪に移して西方寺と改め、更に駄の原へ移して淨土寺と呼ぶに至つた、一時は甚く大破したのを、忠直五千石の中から修繕して一廉の大寺にしたといふ、現存する墓標は圓柱形の花崗石で「故越前國從三位參議西嚴院殿」の十四字が刻してある、堂の前の茶毘所の跡には火葬場の杉と呼ぶ遺跡もある、忠直の墓の隣に西乘院露月妙唱大姉の墓がある、これは忠直の愛妾お蘭の方の墓で、其の隣にお鶴の生んだ春莊幻花童女の墓もある。

水戸黄門 (二國女の巻) 終

昭和二年四月廿五日發行

水戸黄門 (二國女の巻)

定價壹圓七十錢

著者 碧瑠璃園

發行者 大鐘閣

印刷者 忠誠堂印刷所



發行所

東京・神田・今川小路

大鐘閣

電話九段三一二七  
振替東京三三六一八

碧瑠璃園著

物語日本史 全十二卷

第一卷 神代の巻(既刊)  
 第二卷 建國の巻(同)  
 第三卷 海外發展の巻(同)  
 第四卷 佛教傳來の巻(同)  
 第五卷 文化革新の巻(同)  
 第六卷 奈良朝の巻(近刊)  
 第七卷 平安朝の巻(近刊)

第八卷 源平の巻(續刊)  
 第九卷 鎌倉の巻(同)  
 第十卷 吉野朝の巻(同)  
 第十一卷 安土城の巻(同)  
 第十二卷 大阪城の巻(同)  
 別巻 徳川史—明治史

四六版クローネ 定價各二圓廿錢  
 上刷本 尙難 送料各十二

31  
734

終